



源氏物語抄卷第十

目錄

夕霧

沙汰



夕秀 廿三

山崎為寒必、討まらうと秀とあり 源氏又十方

総虫をの束の秋よりい巻おうけくをまをれ事あり

あり、ゆり 人ともぞく心死す所、うらんとかろそを

涙の巻よとまゝ人を好むかて所へ可強やせ也

三つうなと 女二乃まれきあえ新あり、なるまと也

けいめよりうらう夕の心中

をれとりふ 山城國、小野必前二あり、う治に一を

撰川乃藤たうのとま、前死惟る乃み、れ治ひ

前死ひし

西いのりれゆり 治ともあり

魚心チシ子とみ不及とて終くを死

ちうまゆりと 拍兄弟

并れ悉く 拍の所へ行き初場大鳥とす由言とあり
すらなり

あとのおけり ちんちんおめさ珍く間ぬきまうてやふ
らそとや 升てハ伊勢拍種よ 伊勢國升てハまて
とまわさとて心切て可説死あまてもわさとを

宿トすト也 終ト #ト

海衣

ことくしき取さぬ 大おるれをなり

まう 女二れまやと前の代へ書り入り

おの町こ希さとり 雲升拍種しぬ也

七月十日ゆりり 申元十日 申旬也

たのしく 浪息所カ拍ト種トとる也

松サの崎サ乃ト山 され志 名メ茶チりウ前ア孫トも秋の巻

しき取さくなり

ちうままささとて 奥也 小聖の里れ神なりし

いとしく三けなり 浪息カ乃ト浪息也

今志り 命也

わさらせ紗ひし 夕詞

孫の浪まのらひ 小町セ山タ広

さらりあり 女二とおりり

あはれみの 伊勢所乃町こまを

まじれぬお 小おまをまどころのたつれ大お守の妹妹下

葉のみとこなり

年比と 拍は三年より成ぬ

又しうかえをひつのおうたのき

好多人なとけうをむくまうとくし 夕

いつやうひなまこと作まをまんとかり

めからうれきー 位年もまのまの時とせ

おのまをさう かのずいとも平あり

すくせいのうとくま せうじうすしある夕乃力上

おゆそ 花不折しと年ふる人いまのいんと
つるま

こむめてよらんまきり

けふいやはあつり せうおれい

まけくうまを 伊勢所の垂舞舞代も廿二の北北後後

れと見あつりひねり 廿二もあありのたまくまひ

とせ抽のけれおそり 廿二もあありのたまくまひ

夕へ花物おきり

こままの まれくと夕者者で廿二とまふとある礼後也

葉のふけりり 夕れ詞 おりま後也

秋まきせゆもを夕のうをくま 歌とまを所力上と葉

すうを葉葉れれ共抽とおやー ちうとまを伊勢所れ煩の

をれくー 盛まをきたりううお盛葉れまおけり

まいて可盛葉らんとなり

あなごの 伊勢所乃町こまご

まのれぬお 小おまをまごころのたのれ大和守の妹落

葉のゆとこなり

年比と 拍後三年より殿ぬ

又うらなまをひのふつたのき

好多人なとけをむくさうとくし 夕

いつやうひなまとけをむくさうとくし

めあらしれき 位年もまのさすけとせ

おのまをさう 女のまいとま平あり

すくせいのまをさう 女二うひうすしあつ夕乃力上

けとせ めとをたれてとむけてよかんまきり

けふいやはあつり 女落おれ心

まのくさま 伊勢所の垂髪面代も女二の化粧おれ心

おと見あつりひねり 女二もあおのるたまきまきり

とせ抽のけれおそり 女二もあおのるたまきまきり

夕へ化粧おせり

こままの まれうと夕名書で女二とまおとあつ化粧也

あまのふけりり 夕れ詞 おりき化粧也

秋まきませゆもを夕のうをまきとまを所力上と葉

すうを葉おれ化粧とおり 女二もあおのるたまきまきり

をれくくく盛まてきたりうらなまおれまきり

まいて可強まらんとかり

たつこのふとら伊息前乃ためよりこみやをいぬ心
中一紙とてつらゆり 夕のるしそ勿論也 三十日

たつこのふとら伊息前乃ためよりこみやをいぬ心
中一紙とてつらゆり 夕のるしそ勿論也 三十日

ふとらんぬびヤ一上とるこ
とあはれこさ 伊息前へれび思切と思ふをき曲落
致取ふらうみやまへへは源切とてすれとがり

志のりして六町おろし建り 五拜否
いと山よ けりる也

まろてん切こも 夕鏡
山里代旁 夕や 心のゆ也 中志林也

雖^ト愁^ル夕^ト嘉^ト煙^ト入^ト物^ト只^ト巻^ト約^ト志^ト出^ト馬^ト勢^ト 夕代旁よりんをを秀
選りつらやとハ儒者乃ゆ也

山つれ旁 心をけり夕のあつまきむあふとやけり
とつらとやうらんきとめとや 考乃とひれう

と志つら様けりつらとつらとめとめとめとめと
をるがハれ何あるまとむ心れ せれうらととつら

をのめま一死切こらつらなるる
中一室けりつらとや あはれへヤ一紙詞也

家終をみしを 曹公とて人を愛護よりて大考あひて
るこ^扶突^トとと 在^ト而^トやうとへけりてぬうひたれりり

やうとせ 遜 日中紀 遊字む回
とつらとつらとつらとつら

清きる人々 けしきもまはせしむる詞也

寄付おくりてせたる心とせ老のとも相違ぬやと

見えぬぬもさ 又れいそまの又あゆま

まあけあう 夕心

けうこのせう 心を大まぬ監

い律師 けうりこしる事

ごまし 護符は也 うわれ時

つるしと形と花 賀茂上ノ下社御之事
上社 賀茂御 小野々 大野御 錦御々
下社 栗柄野々 兼倉御 上栗柄野々 出雲々
今栗山城愛宕郡之内小野々ハ上賀茂領也
栗柄野々ハ下社領ノ寛仁二年十一月廿五日陣
定ありて官符とらふれかりぬけ物終りくる
とのいそりらうらんとといひあへ又宇佐の郡
りと小野栗柄野ありそれといふやあはれ

座と云はてくはすし乃ゆふ
しつかり賀茂下社御之事
い出雲の寛仁二年十一月
れとりぬいひつと大裏に陣

座より定られらるる賀茂ちゆくくるを野と云あはれ

松若別前一名もや 小栗柄野御の探下社 賀茂山為下社

系可も復直至小野の可為上社 社系 上下略

小志記を之

みちたとくし 夕詞

そひわさらん 湯島へ言のうりぬらんもなり

みるるりさるお せううとほさあらん也

いこまうたとり くらまにうく

あれやうお あせの振也

あまらうお うまらうなり

おきぬらうらま 女二の詞 思ひますまを人の御也

此の事人々 此の事のみは事付かゝる詞也

書付かゝりて事ある事とや老のとも相違妙やと

見えぬぬもさ 又れは事その見えぬもさ

まらけあう 夕心

けうさのせう 心を大まね監

は律師 けうりこしる事

ごらん 護身は也 夕心也

くるも聖 夕心大極もく小聖と云はてくはすもりあふ

と可いぬ事道と云はすすくはり夕心下社御之事

栗柄野カリスノの上栗柄野カリスノの暮念カリスノの出来の寛文二年十一月

女メ又日ヒ御定ミま官クをカさんシりクぬヒるト大裏オにク

座マて定マられルるト夕心セちカくクるト聖トと云ハるカ

松若マツノ別ワ前ノ一ヒ名ノ也 小栗柄野御コリスノの探サ下カ社ノ菱山ヒギ為ル下カ社

系キ可クもモ夜ヨ直チ至シ小コ野ノの可カ為ル上ウ社ノ也 上下略

小志記コシキ在リ之

みちたとくし 夕心

そひわさらん 佛ブツ盤ハシ前ノへ言ハのうウりカぬルんトなり

みるるりさるふ せうろと云ハるカるカ人ノ也

ゆユこコうウたタとトり くるクるルにニく

あれやうふ あせの振ハ也

あせアとトひ くるクるルにニなり

かきぬらうらま 夕二の詞 思オモひヒもモすスまマをを人ノの御ミ也

つしうらこまゝ 夕討

つとむうこまのうしき 目又心也 人心を^シ海^シ切^ル也

好まめ兒とりのつわのとうりてうあまことる

つひつり 悉くおれむをふふとくれと一もせ

ぬ胸をそありたり

つひあふぬあふきあ つひあふりこなき事とる

あそひくと 存のあしうりを操持可法と也

とくありの 大のこれ人はふ也

我のう 夕討

しきくしき 愚^ク癡^クれむなり

世^ノ成^ルより 拍とさひあひの事也

めきぬきう うこてくまうのうまあうなり

そまのうの 女^ノ文^ノ討^ト拍^トあひ^ハ袖^ハを^ハ我^ノ力^ノうとる

我れみやあ 我とみちるとは終てとけゆうそ夕れぬを

ととさんとせわれそふき拍と夕とつひまを

目のむろつひきて 文の前のりなる成ゆればし

つひつりあり

つひつりあり 文のうふあふると我なりと思ふ也

い家^ノ在^リ之 いろし新注^ノ奥^ノ書^也

けふありう 名とくすく文とくは人れをさむ目

まふるあふりしとけおれとるまはふまはれ心也

花^ノ説^ハひつりしき也

Handwritten notes on a small slip of paper at the top left of the page.

けふあつうぢうぢうのうらなと夕暮れにやせ中にと急流
うんとどてめていふよ歌ししうを道^{チカヨ}言と思ひ
多かりきみてられこつたうきまゝにぬ入るひ
心面白可^レ用之

大町いハ方 一度戦よあひ流ひしうすきせとまは
まともさを世上ういひとせば後理れむ可^レ流
大町いヤうすとも拍^レ事ハのりくれめしうなり
こそ乃 拍也

お母いおこまを 拍^レ夕をかりひれしう流をま
流心のうらやも 女ま乃心中に拍^レ木の事と思ふ也
めき流しま乃まらし 拍^レのうとくししめり

事打とやされるまゆの流しぬまらしむらうし
よあみきく 夕お方 拍^レ乃妹也
大町の 流仕れ夕を響^カるれしりり
院も 朱雀

ゆき前 一向い流をあらんしむらうのたゝとりり
お母い志まよ 無^レおまじと也
のうらまをいおつしすうまをいむ心唯^カ今とけ
ぬお程まて夕と魚い新^レおまきしむらうをれと也
おあつうまいむらうの流しむらうの事とやちぬ
いしむらうの事と也 ちういぬいもはしひ物
はくまとちい^レ流はししうらめんとりり

まいてりこよを 小野をかりひやまへ入る

夕れむ中

夏冬と 夕れヒツナク装束改元衣の着る所用也

おまへろー 花ちられまへる也

うーこれ 小野へや 内苑へも不入を女二れ内苑し

もきぬけらるるー

うーなぬやーまも 袖ねのふろーまてまよとたり

たふらんとなり

ゑたてりる 云浦心それやこれ中まも

まあまろくさるん 沖島へ入流ろやーせうれと思ふ也

昔物うーとほも ちれく舟橋ふとの事なるー

大和物語を定私可也

入く何うもりののふ 中身なれまへやーまも

心をりのふは息承のすてまもーのらまーと間を

れりみふれうと女二とまもまもくやゆりまもて

けくのぬおむりのーまも

人ありらるる 女二の心

思ひやうののー 夕暮乃とーはらぬ事なり

ふれをふく番をけく 夕れ文殊

玉ー井坂文 あのさうー物れ中まもや入まもて

魂れなきむらするつものむくまもをる魂の女二ー

おしんけいなり

ほのぼのの 為と捨てけり ちまたもさぢりひよりか
る家とれさむるさうり

ひりくさくさく 夕乃心屋敷のいふた

まじれききけり 後物めだつて又いふもなへて

そのおてもるまゐる人く不審ざり

何ものよはきこも 夕霧のむら

うしろのい ぬまもくさておししぬるもさく

むりいあつちり

あうちあう 業信

あつてくさくさく ありまもま回事

うよちうとくさくさく

さた事も 別なりもなかく 指れ遺言のい

ツカ ちかむしきくさく

くともちく 新指り今お忌めす

つてあなうこそ 律師燈

みまの 見え

せらあも 大切あもるん事

うういん 一向ひんくさく

やうあ ちかろるはや用

あつて 中事や ちかろる

さうい 弘縁

みまの表 みるかともちかろる

ぢぢぢぢぢぢぢ 中人を長教書^{ヤミ}の海^{ウミ}よりも同じ道と也
人のいふを 捨てる也 有りしは^シさ^サぢぢぢぢぢぢぢ

いゝあや一夫 伊勢歌の詞

ぢぢぢぢぢぢ 伊勢歌の詞と也まめて^マて^メ對面^{タイ}をしんと也一ぢぢぢぢぢぢぢ
一ぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢ 伊て^イを^ヲ暫^シ時^トの^ノ内^ノ滞^シ留^ルる^ル事^ト也

いゝぢぢぢぢぢぢ 夕暮れ事也

いゝぢぢぢぢぢぢ 首^ウ歌^カ也

いぢぢぢぢぢぢ 人のゆゑに事一はと一立なと也
まあうぢぢぢぢぢぢ ぬ人ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

まをぢぢぢぢぢぢ 夕暮のぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

後朝又^ノ又^ノ至^リ美^ク事^ト曲^トな^リぢぢぢぢ

と^トも^トあ^リて^モ 伊勢歌の詞 と^トも^トあ^リて^モ 一ぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢ ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

いゝぢぢぢぢぢぢ ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

いゝぢぢぢぢぢぢ ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

いゝぢぢぢぢぢぢ

皇乃^{ミコ}新^ニひ 伊勢所詞^{イセ}も^モけ^レて^モ一ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
いゝぢぢぢぢぢぢ ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
いゝぢぢぢぢぢぢ ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
いゝぢぢぢぢぢぢ ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
いゝぢぢぢぢぢぢ ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

かゝるひさうよへれる哉

と人なく 女房の心を思ふる事

あはれあまの志のりえん心也

せしむる世 けそ 氣なり

けそ 氣なり

とゆうだけこのめ 文を那の為はひしふき扱とて

しつゝも女^{キヤビ}障子のめきそへたてあひはひしと

やせし君のゆるはれとせ 夕暮を障子るたてあ

りつゝのたまふよまをふへやせしとせ

かげいぬ人るたてま 気息所は秋はふ御をも女二つと

女お今やとぬなり

あの事ふのともあはす 指かとのるる事

ゆつてつうひなく人れしふ 人云也

別人もくも人言はてぬ乃たの事もああらん事あり

と夕ハせめくやとなくあめあ人と 嘆きそ実事なり

かゝるまじとあらん いろいろ

うもゆりう 二人うへに申さきいりくとなり

ぬまこめ しのさや本の道なりぬめしとてり 確^{カヘヌルハシ}漆^{ツク}ぬて書

かどて^{デヤト}潤度^{ツク}なりへ垂^シ前^シもや^シ悪^シて^シ垂^シ成^シし

あああをそとて 愛のふりれやなり

ぬけうしりの 一日^{モレハ}不^レ見^ル熱^シ之^ル身 白^ク氏^ノ又

のらつれらん 後^ノ世^ノ也

又めくり ハシ 生念タカも平不タカ可三道タカなりなり

あふらに 親子タカ乃中もあま里訓タカてきいりくとも

思ふとそりこし人あふりらん志のむいひ

みねまき

胸きりめきすと 如二所不食也

くく心ちの 恒息所のよ路一死ていなり

胸タカすりあふりよ 念と不れ滞氣乃よ念の如二れ也

のあくひる一感也

お月しよも宿心も下にうひて 念と夕との中一也

思ふよりとてあは夕こよひ必所出あらんと下り

得ゆふお文けりりまれば恒息所乃心所をたり

寝きあえ流し 内也事 あまとなり

念り 見下と云候いゆ

あふら 御也るなりを申しくあまへらる振あ

らんとも

ひこふる心を 付也 つれなきにふり又思控くしき也

後より心んのをとを花にねいタうりれ又の中ひ流ふるをせくとを云り

のしともうり 念もいおなくれと花恒息所のけ又と念控てきいせ念のしき抽也 つれく念

やうらう又兼ふもあはらうりようふもてこ 念とせのけくきいりこへそ

心の初うこあふよ念とさうみゆらけと讀り

片のあく念とけく念をすを念心のあはくみんと 夕へつれる念をのこちくの念感へし又候ハもやあひ

又めくり ハミ 生念タビも不可道なり

あふりに ネ 親子乃中もあまり訓てきりくとも

思ふとそりこ一人あふりくんちのむいひ

みねきき

物きりめきすと 女二所不食也

くはむちの 血盤のうろくたてわり

胎ハすりあふり 氣をたけ氣乃うまの女二れむ

のあくむり成也

お母しよもあむむも下にうひて 女と女との中

思ふよりとてあふは女こふひ必出あらんと下

物あふり文けりりもれも血盤のむあもわり

物きあえぬ 内也事あまとなり

産り 足下と云後いぬ

あふり 物あふりなくを中くあまへり

らんとも

ひこころむを 付也 つれなきにふり又思接くきと也

せくくふり 女勢といひあふりせくとあま

山はせせくちうるれとせむのむ物也 づいぐを

あふり物あれもこころをせのあふりくひりくへそ

むのあふりあふりよとあふりくうみゆりけく ヨメ 讀り

かのあふりあふりくむあふりあふりあふりくみんと

夕へつれるあふりあふりあふりあふりあふりあふり

Handwritten notes on a small slip of paper at the top of the page.

初し成ともくせきもたもくこるしもちのふむよきなり
けいぬいよくとんとなりは後もごうむきんるん
むちよむかふとあるあひこ後儀理も可能もさやうふ
あひたるときなくてさすむちよふかなんといひ
とある也又は回まてれ文をけさやうふまししと恨た
れ文以下あひひひーやふかたせだれとありめを
むちよむかふて志すもこよひとひたすもぬるを
おすしめくさるわ

あなこちのうう 人同よハ何ともあまこなしくを怒よ
あつとるわ

志なり 志なり也 々の心申をみんとて津島飛乃也

事あり

このりありく 津島飛乃を女二のふひは後
町ふあま事ありとてううりあやもはうらとあま
やとたり

こころしき 志なりとて女二れ思ふまうくか押さる
つひくとてきたれはあまふとひたれあうとあゆらし
よるひのまし一たつらとてひすそ紗あり三曲とて
たゆめり 女はあうりつとてたゆめて抽氣のくり
むとるわ

たつらせ 女二を抽氣の人お結する後入とて
なまなまをたつらとてううとてあまの抽のあ

あまのこゝろをなほしむるを

ひびきの声 志井へゆめありてまのぬり小舟へゆめあり
らまゑするありうかぢしと思念てのゆめ也

ちつゝ あこいぢ 引舞ふ不及

ふ糸のひらり 花の香

なごくし 年一人なごころとかり

おもひのあや 夕乃主人を何れ思ふぬと此後心也

年月よそおぬ ぶとくしと此後よりて志井討

うらけだらき夕のくすしゆめ也 計りく白の世

くしゆめとあまのつりぬむむむむとあま

ふのゆめれ事 男のあまのこゝろよと世とれか

ひとあま

まじりあまのこゝろよとあまのこゝろと人衆

あまのこゝろよとあま

とれせうの 源氏福儀也 津波を小の雄大を唯雅

よちりこゝろよとあまのこゝろ

あまたりあまのこゝろよとあまのこゝろ

あまのこゝろよとあま

れきりのなごり 竹取物語あまのこゝろよとあまのこゝろ

夫婦の相遠をあまのこゝろ

あまのこゝろよとあま

あまのこゝろよとあまのこゝろ
誘う簡しとあま

あざむき 老すらひやあさけりも心を透れ

ちぬらん 雲井世二 夕芳世

よみてらり 源氏又十才女一乃時又生流人耳 かねく

ふりつゝと人のあつていふて儼おゆと心をすらす

あまのふ 町言と用 夕詞

はろとそ 女房おむとあはつとけつととせり

とけ者て 六位すくせと云しめれとたこの中へ

とすらよやとつきてを種とれり 地獄とせらる

あひなき人乃 如二の故たあらとあとのけひなる

又所井よあはへるするれとあまおとあゝぬとも

のけひのあつるさ

大ゆよれ 六位さくせりひ一人也

あざり 求也 手合 きのあされも同じれ 求合

ひのち一里 列芳詞汁丸 人よあまんののるれよ

思とまて胸へ 夕火おむやけり

つ連も今 夕火一めよりれきなる今起所押とて也

町のりともいとも 夕乃文と書流とぬるさていれおの

うとあふしめをせり

ちくしてぐり 所息承へぬるあらんをそとつと

あま文と丸らししあれをれりめさんと也

れこの片をうて 雲井れ心中せ用乃文とられんと

思るて何共此事に不及一教のうと詞也

大山風 女二にふきておやまき間花をへ又と夕れ討

候うきてや花られへ三山風前と可路扱ふ花押ふもや

何れれうき 前討とくきてや

ふの人お 夕と世上れ好多人よはして花初ふともや

はれ登 乃めが海きうくきう物ととなり

おきー 夕とや

ううひくる一紀 女郎花の姿のひならむー

一扱はうりの宿とくつとてこの討るや

うまはくぬき海とて 書中よりそ大うこはくす山懸所

れおのしめーこの押と推量也

あし急 心乃おらうくぬじや あし急ーえも心通元

いてや 志井の^ス後とも我なとこもと

人を明くき 山懸所

ゆりな〜んち うんにち 九^ク坂目 志る^ハ中^カ好^カ日^リ

玉所のふ 万一山懸所れゆらし結とく意目いり〜んや

控よりらん づうお〜つりおふよりらんお登山の〜

よりたはるをとなりの海

ひ舞れれむそ志のあむと念あり

つとあつ〜んえ 文討

秋ぬ〜身 志入志のやも志実事〜とるや

よへ乃つ〜んき 志おの^グ志^シを^ビはと〜と不許事〜とや

〜んき〜んき〜んや

要あよら〜ん

女志願 巻 七
わこりつと思へたけぬの海より出くみよ

ちり理はこりりくるれたむと志する事よこひか
うらやなむもものななるる

是と死馬よりし 駿馬 後れ緒を腰力の業より

とてや 大おおよやけつこのせうなり

後乃ちあえども 此又よては息前よりすみ入れと

空し何らんともやうれと息と文とちのさしれたる

もてけおまてす言成す曲思るなり

ちうしし又れ 疾疾るる

おしいみう 沙息おのひと女二れたりめむむなり

いとむらう 此息承乃まごえまれもや

今あつお まへの清美又とりこなり

みまぐせ とをりひなり今を何事もはか別多し

四年れ程とや

うなこさ海 心おさなく夕暮よあひびひ一奉り

振の事きむお思ひとなりし

人よこま 忠臣不事ニ志貞女不更ニ夫

思ひれおよ 拍木よあひびひも地中意とや

院よりけめ 兼権よりびれたと殺仕へもやゆあ

路ふあきなる馬我一人ていあくとて拍うとる

あひまーとるつと

末の世まで 後代おも答こ仰しく拍れ事やくらし

うゝぬとなり

大をよまこらて 拍ふり 別流ひ 事也 乃乃うれと
在の要もの三秘運はりのふたぎくぬーううん
ふの乃ほふとて 夕方のぬとてこれ相まて人のを不及
力せのて今よりとせおの候りやれ心流を夜無言と候ての
は息所の程

こよあう 夕の心流りこち流へま
とこめて 文をたれく抄ふと文の思流へつとまあや
極うーとての流ふるま
人よととり 文の流あなり
契あつゆりあん よううぬ契りの事也 拍をめぐむ
も又せ言となり

くうう 是息所の流 一ひんおひえ
佛もつうく 仏相程に成就不成就と極し書り 可ん
おきし流 文をのきし流ふ也
されしこれ流と 女師流の言と也
やうてまへ 條流の人なりもあうーるんとしたとく
うーかたり
まうれと 例も相のけお縁入抄ひし事流なり
されへ入りきり 流傳を為也
つひ乃るふりとも つひ志のなり成就てあとの流候し也
日比 ありけい 朱蓮流文の詞

は母よあささ 泣息前遺言^{ネコシ}うー久しく訪ししてうすれ

あめふとまーなり

やまとれりこ 泣^{ナク}やまをー

らふりのり 夕霧詞 きをまここ糸けまよて乃びぬ

ヨウ 翠直^{ヨシ}吊あふまー事^{コト}るれやもあつたれあ入吊の日

まふなうてをるれとそ小舟入のうまやあうひあ入り

ひえへたてめをらー 死人^シれあうこらー 屏風^{ビョウブ}がた

はるなり

むつよこ 夕のむついふまもる

まもさむらねと けりなるありらとさむら問をま物と

三^ニ分 儂^ニなるといふん用也

花舟しなるき後 大船歌は泣息前^ハ定事^ニなる

あつきなく成^ナりひーと女二なるつーくたひひてい

へも志^シ活^スぬうや

りりおあし 夕へ女二の清^スき事^ハやーとんと女おや

只今をる人^トと 女二をり成^シし人とひとーあう

なることなる

わこらせ 夕の泣^キあま女二をりまうあうことなる

よてい

泣^キあまやれ入^レた 夕詞

みのれりたこー 泣息前^ハ夕と文とのふりよてあひ

るるあひーと初^メのめりや

おこちをいぢりしをいぢりまふ 夕と昏くおこちをいぢり
つとむ女おこちをいぢり

うきをうきするうきして 慈愛も程あれうきをうきとる
のほひせらるるも あつぬうほるれまてハ女をいぢり
神乃抄ひき夕れ討ぬい又可成ん

程をいぢり 慈愛も自地程なくさむう町分来んとも也
又女をいぢり二となくいぢりすられていさうりのほむ
事一もあつぬうと也いぢり可成ん

こちひも 葬送今世をいぢりと思ふ也 近にお店屋なり
北後付ゆり

みてまつうへく 吾のみるめ 親子の申もあまう

はれくししとのこちをいぢり

と袖のきよさ 炭竈かとの煙よりま人の煙と思ひまの
るてなくいぢりと思ふ心丸

西のひきと 不入り事丸 服若者也

國史云 延暦八年十二月皇太后崩天皇錫鑄避宮
西廂皇太子及群臣奉養 若者つて群とてあまの

は一と一度も群とあまも也

ひれすもひく 涙也

いぢりいぢり いぢりいぢりいぢりいぢりいぢり

一もいぢりいぢりいぢりいぢり

いぢりいぢり 西又也

うとうひなく 衰事^{チツ}あることれり^{サレ}のりて又回^{サレ}を
さり^{チツ}と致^{チツ}てうせ^{チツ}ひあ^{チツ}となり

後代^{チツ}存^{チツ}の^{チツ}所^{チツ}つ^{チツ}とも 女^{チツ}二^{チツ}お^{チツ}な^{チツ}く^{チツ}成^{チツ}終^{チツ}ひ^{チツ}う^{チツ}も^{チツ}條^{チツ}終^{チツ}の^{チツ}陸^{チツ}
と^{チツ}は^{チツ}一^{チツ}志^{チツ}の^{チツ}入^{チツ}る^{チツ}也

む^{チツ}ひ^{チツ}に^{チツ}三^{チツ}の^{チツ} 夕^{チツ}と^{チツ}ひ^{チツ}の^{チツ}り^{チツ}一^{チツ}流^{チツ}も^{チツ}く^{チツ}飛^{チツ}び^{チツ}し^{チツ}と^{チツ}思^{チツ}る^{チツ}事^{チツ}也
又^{チツ}急^{チツ}終^{チツ}す^{チツ}る^{チツ} 悲^{チツ}切^{チツ}と^{チツ}志^{チツ}終^{チツ}ぬ^{チツ}の^{チツ}お^{チツ}終^{チツ}ふ^{チツ}く^{チツ}又^{チツ}物^{チツ}と^{チツ}也

あ^{チツ}う^{チツ}く^{チツ}ま^{チツ}わ^{チツ}を^{チツ}な^{チツ}り^{チツ}
し^{チツ}事^{チツ}の^{チツ} 吳^{チツ}る^{チツ}が^{チツ}な^{チツ}く^{チツ}ま^{チツ}く^{チツ}一^{チツ}愁^{チツ}糸^{チツ}吊^{チツ}け^{チツ}り^{チツ}な^{チツ}ら^{チツ}く^{チツ}と^{チツ}好^{チツ}
久^{チツ}か^{チツ}く^{チツ}も^{チツ}く^{チツ}そ^{チツ}と^{チツ}也

我^{チツ}心^{チツ}小^{チツ}恙^{チツ}と^{チツ} 為^{チツ}上^{チツ}乃^{チツ}終^{チツ}と^{チツ}人^{チツ}れ^{チツ}同^{チツ}を^{チツ}う^{チツ}れ^{チツ}と^{チツ}物^{チツ}を^{チツ}と^{チツ}なり^{チツ}
大^{チツ}文^{チツ} 夕^{チツ}の^{チツ}祖^{チツ}母^{チツ}

こ^{チツ}と^{チツ}り^{チツ}と^{チツ}乃^{チツ}世^{チツ}れ^{チツ} 志^{チツ}定^{チツ}と^{チツ}なり^{チツ}
大^{チツ}や^{チツ}あ^{チツ}く^{チツ}一^{チツ}に^{チツ} 一^{チツ}面^{チツ}と^{チツ}ら^{チツ}が^{チツ}或^{チツ}け^{チツ}り^{チツ}を^{チツ}と^{チツ}る^{チツ}也

日^{チツ}の^{チツ}方^{チツ} 我^{チツ}れ^{チツ}や^{チツ}と^{チツ}て^{チツ}あ^{チツ}れ^{チツ}も^{チツ}ひ^{チツ}り^{チツ}も^{チツ}あ^{チツ}く^{チツ}す^{チツ}も^{チツ}なり^{チツ}孝^{チツ}
不^{チツ}孝^{チツ}誤^{チツ}思^{チツ}合^{チツ}め^{チツ}入^{チツ}る^{チツ}也

こ^{チツ}来^{チツ}門^{チツ}の^{チツ}こ^{チツ} 志^{チツ}定^{チツ}と^{チツ}別^{チツ}て^{チツ}心^{チツ}付^{チツ}て^{チツ}孝^{チツ}り^{チツ}と^{チツ}又^{チツ}志^{チツ}て^{チツ}信^{チツ}用^{チツ}
せ^{チツ}一^{チツ}と^{チツ}なり^{チツ}

又^{チツ}の^{チツ}よ^{チツ}り^{チツ}
そ^{チツ}う^{チツ}る^{チツ}也^{チツ} 中^{チツ}辨^{チツ}され^{チツ}も^{チツ}流^{チツ}中^{チツ}の^{チツ}事^{チツ}あ^{チツ}る^{チツ}も^{チツ}一^{チツ}と^{チツ}る^{チツ}也

あ^{チツ}る^{チツ}れ^{チツ}も^{チツ}志^{チツ} 志^{チツ}并^{チツ} 志^{チツ}定^{チツ}と^{チツ}一^{チツ}と^{チツ}女^{チツ}二^{チツ}也^{チツ}

お^{チツ}終^{チツ}の^{チツ}な^{チツ}き^{チツ} 一^{チツ}と^{チツ}あ^{チツ}れ^{チツ}の^{チツ}事^{チツ}也^{チツ}
お^{チツ}あ^{チツ}の^{チツ} 一^{チツ}と^{チツ}あ^{チツ}れ^{チツ}を^{チツ}な^{チツ}す^{チツ}も^{チツ}一^{チツ}と^{チツ}なり^{チツ}

ついでとて花夕方の色をうきうきと見
流のこころをそれとては終るまふのこころよ
と海つまうらわし世れいごとつり
行くく今とて花雲の居の程はなほとてあ
まのまゝいのこころぬとてつるこ

は清くままりつる春の事一
他とてや 我首の筆の垣ねよ
あしりりさうり いひ成へし

狂歌へたて 夕れ心中書并の扱ふるたてくま乃ま

おもむいた事と思ひぬ入る

や并の心を扱ふるを心故て可治ん

又ついで お登り也

こよほきと ひびすう興の事と思ひたらぬ入る

よの一粒 清徳のこころしはまの文とてくま

りこころまうくとびり

あゝいふとく ろまふよまふまふとてくま

九月十日あはれ 聖山とてぬとつるこころ也

春のくま 引舞よ不及

うれへゆがや 人乃たひひまたよりあり

よりあなけお 虫の末摘花とてによりおなけるこ

葉摘れ時分りるる

うらめ おころのきらつくとすまをまはり初ハヤの護也

志まふ 自然よとてはれく許也

を乃あいの きこしえあれさ海なり

花ちのやとて おてらぬひそ 遊也

芳もつとありや 虫お夕よなあゆりや

なをくくと こたへぬおよれとるこ

600
600
600
600
600

ひの心とらま さいうをたはし^まくまらうる事の事成
ししは并の事候も不届物とて也 我身万事の極なり
とて我れをきぬとてうきしうらうら さい成し
たむくへたて 夕れ心中を并の扱ふるたてくまらま
おもる事と思ひ入る

世并の心を扱ふるて心ぬて可成なり

又ひの心 お世へ也

とてよき事とて ひの心とて興の事と思ひたらぬ入る

よの心 夢の心とていしは夢の心とていしは夢

の心とていしは夢

とていしは夢の心とていしは夢の心とていしは夢

九月十日ありて 野山とていしは夢の心とていしは夢

夢の心とていしは夢

うれへゆがや 人乃ちのひまたうらあり

うらありけお 虫の末極なりとていしは夢の心とていしは夢

夢極れ時分なるなり

うらめ おうらのきらうくとすまをまわり切の縁也

とていしは夢 自然とていしは夢

とていしは夢の きとていしは夢

たちの事とて おうらありけお

夢の心とていしは夢 虫おたはしは夢

なとていしは夢 ことなへ虫およれとていしは夢

すまじとひえ 木下成女おりの歌へひきて用意可也

けふかこ 馬交によまり 志こころの浅深あるは

おのけさきぬ 夕暮乃詞涕息おのきをいりてさごと也

みる人ごもふ 思われと又せようりとの志を物や思ひ

と人のやまき

この人おぬ まねれけりるりり夕乃をいれしのは

ぬるやとそりていり

包セーキョウ遊ユウをウチ事コト

けこくく 不ふとむとるま

れまへよん あふそ不入吳中乃何を何息ぬとてと

可か心こころぬれ夕暮の通ひぬ事也まよふ人我りのまこと

得とくる

うよやうも 夕暮詞をまやと心をれあて採とるま

えんをうも 夕をけしてけこ也

山山色 朱雀乃ぬるや 中乃 狂言と云心也

されへえいり けうれを涕是人のまき世よを定とる

事とかり

まことと 世よ女二のあしと思ふた不叶世りりし

めくれ別れの 何息所れり也

けさきとめや 林をれと山とよむまてなく麻の我を

とらうやひとまぬる兼へ

甲と成りさ 夕露スエあつくそを惜め所

結むすぶ

山城北小野乃山への御まことうこれなごりなごりうの
孫のん

敬存言 女おむさめ也

ねるあらし 油定流ふわあらし也なり

十三年 九月 九日

とくらの山も 引寄新な今めし八月十又夜のまじりる

しる面白也 つけくかの今夜乃月れくもあ入ま小倉

れ山もあなむつうらんとあらしもくくくくくくくく

大納言 指也 あだれ

み一人れ言 夕むハ明也 指のりるる

ありきりー ようしぬくせと也 あらぬきちとむい

うしりしれん

しき 志井也 ござらあ入あふお也

六条院乃人くと あまのの中あだしつる家とたが

六条院の人々と花雲の居れく思ひゆくと
六条院の思人うういたくひと思あひ結てまのりんとせ也 あまのいひあまの
ゆつこくをともあひゆゆを夕雲のれ結つと
それともあつつけくあまのいひもあまの
さうあても夕雲りともあまの人としてこくま
なるたりめやまのあやうおよせれ結つる
人のあつてまらうゆさやあんとあけ
ふれゆゆと

みゆふまのあーやなり

すああやうと物中とあま

甲一と也 昔より夕のあふおなひおまあひ今款

あらしとく

うしきくれ 二一あはうり

うしきくれ 二一あはうり 又あつあはふとむれひ中

山城此小野乃山への田まきころこれなごりなごりころの
孫のん

敬存言 虫おむきぬ也

ねるあしこ 畑定流ふわあしこ也なり

十三年 九月廿九日

とくくの山も 引寄新な今ぬも八月十又夜のまりのを

しる面白也 引くかの今教乃月れくもあ入き小倉

れ山もあなむつううんさささささささささささ

大納言 指也 あだれ

み一人れ言 夕むの明也 指のりさる

あうさりー ようしぬとせと也 あうぬさちとむいぬ

うしりしれん

しき 志井也 ござらあ入あふお也

六条院乃人くを あまのの中あだしつるあしたりー

み引あ入る 夕を兼はなること也 あまのいあふあ

てむよのし中志井とくみあふもあまー也なり

あひばらもる院と也

あめれりー 夕を兼の中ああもつるも指中とあふは

あしと也 昔より夕のあふあふひあふあふい今款

あししとる也

うしきくれ 二一あはうり

うししはあー 又あつあぬあともれい中

Handwritten notes at the top of the page, partially cut off.

ふひねりす 養字

つらつらまき 廿二乃今を叩くあまきしをなれ世は女
も思ひたまふわめついで小野まて廿二の夕への清息せむぎ
頃よめらや 明ぬ夜乃妻とせれ養ひるし

くふふとれけり 双引 つらふとつらふよりらん小
野山の上より流れきり一の流 独り

何うをりよふ 雲井鷹心中

月より足跡ひてつりと 夕の又と女二れせめては流し
つらと夕の心るや

人正ろうろろろ 双満是りぬむれ

足跡くあぬへきは 半サキ引割たろ一紙なりし

あさゆふまの 夕の又ろ一きなり乃前の詞あるを

また夕明テセナイの舞や

ともをさすへのらん 引きたぬへろ又を引けくきて是
は物はやあらんとこころれらぬ心を系なり

あごとけし 何よそをれたくはまはひかやもあつら
あつらふ事や

あされ 源とあつらしむるを しれもてなありるを
し物とこなり

つらつらまき 雲井鷹心中又流雲ラキのためつらつら
流仕乃中けお建ぬあもひか也流流せく流仕とくきて
ときかつらのためありとるれと源れは心中

のやうれたり

紫上と源のなぐらん流の事一は源じり

とくしりー 紫上つゝ頼あゝゝゝのあへり

かゝるるに 女頼也 紫上むたくゝ乃世の事と思はるるに

うもたおつてもれくむ あへり頼あゝゝゝのあへり

乃委曲也ふれふなゝひたるとて頼あゝゝゝのうたて

あへりひびきゝゝのとなり

れかゝたてらん 引あ不及

頼あゝゝゝの 〃〃紫心

紫言太子 何よ委 無言太子 波羅奈王之太子品徳ハラクナ カク

カキタ 紫言太子 何よ委 無言太子 波羅奈王之太子品徳 カク

紫言太子 何よ委 無言太子 波羅奈王之太子品徳 カク

紫言太子 何よ委 無言太子 波羅奈王之太子品徳 カク

紫言太子 何よ委 無言太子 波羅奈王之太子品徳 カク

紫言太子 何よ委 無言太子 波羅奈王之太子品徳 カク

紫言太子 何よ委 無言太子 波羅奈王之太子品徳 カク

紫言太子 何よ委 無言太子 波羅奈王之太子品徳 カク

小は師りゝ 法師乃所作也

紫言と云事 紫言と云事 紫言と云事 紫言と云事

わのむ 紫言と云事 紫言と云事 紫言と云事 紫言と云事

源氏伝のいゝと云事 源氏伝のいゝと云事

みとせ ころとせ仍所中 世年可読也 源氏伝十文

朱位女二年一を時分所竟やうおれう一も一志
物ととや三とせを拍逝去^{サキヨ}以後三年也

夕此翁 ニハナキリ 物翁身^{ニハナキリ}の利夕陽^{ニハナキリ}老子^{ニハナキリ}縁^{ニハナキリ} 云う魚^{ニハナキリ}うらなり

いうてあなのうらうら 源詞 きふさあすおれとれとの

おれとらうぬひハ通る^{ニハナキリ}うとがり

海^{ニハナキリ}とあ 夕此翁^{ニハナキリ}世上^{ニハナキリ}の事^{ニハナキリ}を伊^{ニハナキリ}ひ^{ニハナキリ}せ^{ニハナキリ}一人^{ニハナキリ}に出家^{ニハナキリ}お

と影^{ニハナキリ}殿^{ニハナキリ}と也

いけるもの事^{ニハナキリ}きり 云々^{ニハナキリ}迄^{ニハナキリ}な^{ニハナキリ}れた^{ニハナキリ}う^{ニハナキリ}り^{ニハナキリ}な^{ニハナキリ}き^{ニハナキリ}そ^{ニハナキリ}う^{ニハナキリ}なり

おとがり

院^{ニハナキリ}う^{ニハナキリ}り^{ニハナキリ}も 朱^{ニハナキリ}位^{ニハナキリ}也 源^{ニハナキリ}詞^{ニハナキリ}

ものみこ 落^{ニハナキリ}葉^{ニハナキリ}文^{ニハナキリ}なり

あてもありぬ^{ニハナキリ}あ 世^{ニハナキリ}のま^{ニハナキリ}つ^{ニハナキリ}ま^{ニハナキリ}と思^{ニハナキリ}人^{ニハナキリ}なく^{ニハナキリ}成^{ニハナキリ}り^{ニハナキリ}と也

うのみこ^{ニハナキリ}う 落^{ニハナキリ}葉^{ニハナキリ}と^{ニハナキリ}や^{ニハナキリ}三^{ニハナキリ}の^{ニハナキリ}次^{ニハナキリ}う^{ニハナキリ}ハ^{ニハナキリ}朱^{ニハナキリ}位^{ニハナキリ}の^{ニハナキリ}思^{ニハナキリ}る^{ニハナキリ}と^{ニハナキリ}る^{ニハナキリ}

又^{ニハナキリ}の^{ニハナキリ}心^{ニハナキリ}残^{ニハナキリ}み^{ニハナキリ}ん^{ニハナキリ}と^{ニハナキリ}なり

とやま^{ニハナキリ}あ^{ニハナキリ}き 夕^{ニハナキリ}詞^{ニハナキリ}

ま^{ニハナキリ}の^{ニハナキリ}涉^{ニハナキリ}し^{ニハナキリ}とも^{ニハナキリ}う^{ニハナキリ}け^{ニハナキリ}き お^{ニハナキリ}ち^{ニハナキリ}葉^{ニハナキリ}れ^{ニハナキリ}る^{ニハナキリ}ハ^{ニハナキリ}何^{ニハナキリ}と^{ニハナキリ}も^{ニハナキリ}なり

とす^{ニハナキリ}つ^{ニハナキリ}れ^{ニハナキリ}な^{ニハナキリ}く^{ニハナキリ}と也

いとつれあ^{ニハナキリ}ー 夕^{ニハナキリ}の^{ニハナキリ}残^{ニハナキリ}り^{ニハナキリ}と^{ニハナキリ}う^{ニハナキリ}ら^{ニハナキリ}源^{ニハナキリ}此^{ニハナキリ}心^{ニハナキリ}中^{ニハナキリ}

ま^{ニハナキリ}よ^{ニハナキリ}け^{ニハナキリ}心 真^{ニハナキリ}は^{ニハナキリ}此^{ニハナキリ}人^{ニハナキリ}の^{ニハナキリ}お^{ニハナキリ}り^{ニハナキリ}ひ^{ニハナキリ}初^{ニハナキリ}と^{ニハナキリ}る^{ニハナキリ}人^{ニハナキリ}乃^{ニハナキリ}其^{ニハナキリ}思^{ニハナキリ}お^{ニハナキリ}

不^{ニハナキリ}成^{ニハナキリ}抽^{ニハナキリ}と^{ニハナキリ}なり

女^{ニハナキリ}の^{ニハナキリ}心^{ニハナキリ}あ^{ニハナキリ}き^{ニハナキリ}き 夕^{ニハナキリ}ハ^{ニハナキリ}葉^{ニハナキリ}人^{ニハナキリ}な^{ニハナキリ}ま^{ニハナキリ}け^{ニハナキリ}と思^{ニハナキリ}ひ^{ニハナキリ}い^{ニハナキリ}めて^{ニハナキリ}母^{ニハナキリ}の

は^{ニハナキリ}心^{ニハナキリ}あ^{ニハナキリ}き^{ニハナキリ}と^{ニハナキリ}ま^{ニハナキリ}く^{ニハナキリ}る^{ニハナキリ}は^{ニハナキリ}な^{ニハナキリ}る^{ニハナキリ}なり

この日々 物のゆりもなれども見ず終に仕れども
まじりあり

町の人 町をよめる人の如き事となり

お前したるごとく 出家れむや

けふはまご 女二の物の後夕おまひきかへんことい

ひくろふるやと夕をいひうがれ出家まで又

申く故更けとかくてふ道をお尋ねりしとや

あくみゆく 朱雀女三の出家也

来るれを お家計とあること

あいの事 同振也

この浮る 夕のまゝ一契とつけゆするりあると

あけり双比

うむし 尼も成終なく夕を懐てのやうなりしとや

ようりうさ事なるを

もうけいと 伊弉^{イサ}尼を再度お尋ねた女二のまづ

思ひ給えん所なき不花板也

大おりとゆく 女二へ種々もろのゆめをいひてや

うの成びる 女二のむらやんことあ〜となり

る人お 成息前乃むとけひ〜とあぢき〜みきてい

つ^ヒ通^ヒ袖^ヒ〜るおを不^サ意^スた〜りらんと思ふ也

あ〜り〜とも女とらを 成息前れ一糸交〜り〜

なりぬ人れとよよりひ〜ゆくなり

り備えり 一の大和守家にて用意せり

ありおうき泣きし 是よ山者の事^{カニシ}回ひすうと也

たゆらに 陰分堪^{カニシ}忍したるとうと

くふのこしも 大和國勢ふるりあると也

あの町こよ 一のうこ乃道よりたのこをうくるを物ず

さなまため一のあふとる

ほひにくれぬ 女二指と嫁しほひ一奉非すふと也

一兩 女二のあ一乃^子深中あり一あまりひれさる死

とや一上なり

あ川をあふまりき 夕の文なともあをへて今と成てを

いあつてななり

あこぬる 女二の女者あふ人也

娘た道 さことよむる

まのうれぬむら 人くをぬく一とよゆ一とまれ

小自あをぬく一と心な也上振下振れむ一とる

れな一ひとむり

あもあぬ入し 町家遠と也

乃ありり一も 次大れあふの温也くつふの温い

れもあぬあつたさひまなり

びひと引くぬるも 女二れあふ

あくとあそつとらんれふ 咲き子種とを也

花可松丸 人のあ一乃ぬあ入出家あとも大なりと早

かくもてさういふうんは花人このもてさういふと志
しううゝ志のひくられなとせし申くかこうま
くわくくしううー人さうも夕暮かいらぬの人
さくもさういふさういふとおほせし申くわいの
ししもえ志始りぬとく

かたも思ひてあさとりた始へん

まじ申くくれらうりまうりうしとせ
かりれしともかたもさうもてあつういふも人のさうい
とちうさういふなり

あつううこちへりうしと始りあつういふ
今さういふのいせ

あつうのくけいさゆも 何息ぬれ痛中うもあ二と
けくろひけいしやまも

あつうさういふ 海也

あつうのー 女も車か人太刀破といふなり

あつうのー 女

あつうのまもさういふ人させ 黒漆やてまれさういふ

くらうもさういふ花脈志のまもこあとい思深よこ
あつうのまもさういふ人させ
あつうのまもさういふ人させ
あつうのまもさういふ人させ
あつうのまもさういふ人させ

浦嶋の子り 見河海 一条されううまのうひかとみりえ

人さういふうのさういふてみりあつうぬむ母の息子の
あつうのまもさういふ人させ
あつうのまもさういふ人させ
あつうのまもさういふ人させ

あつうのまもさういふ人させ 浦嶋の子り

トヤとてまゝに成るなりと出家一又引もとり悲ひ
あくまは不可成中と心めて可成人まゝの夕を美たの
人れぬむなりひまぬくもかた思ひてあまのりたぬへま
まの中へくれらうまゝのりうしとや け家可成れ
つれとも 力をとらうもてあつたも人のかゝる
とちうらうらなり

あつらう ころりつゝはあつたの け家所と回車成し
今もうらうの心也
あつらうのくけいもやも け家所れ痛中うもせ二と
けくろひのけいもやも
めもきりて 後也

あつらうの 女も車かゝ人太刀成といふなり

あつらうの舞一 文

ころりもまゝに成るなりと 黒漆のてまれらうてんが
とらうまゝののなれせいまゝに成るなりとや
すは 補綴の施すなりとや け家所乃され
あつらうのけいもやも

浦嶋の子り 見河海 一糸たれうらまのらひ打とみり
人へもやうのしとてみりあゝぬむ父母は母の
あつらうのけいもやも け家所乃され
とらうまゝののなれせいまゝに成るなりとや

あつらうのけいもやも 浦嶋の子り

あつらうのけいもやも

あつらうのけいもやも

年へよあれ 夕乃久むうけ給事をも并れ此の
女房前思へる

湯ためよう 双地とも叩くてもめうこはとつこなり
久しを女二に契ひいと心事女の所ためりとし
まこと双也

泣きうけかこき海系りて 服中かき

中嫁娶の儀亦ありて

わくを新かて 抱系すもて夕のはゆ也
きふめすと 故系すてい入まを所の事とせりひぬお
召込給めんとする

力れため 落葉のゆ力ためふやねとろり遊くも只

今何ぞも不成と也

あやしく 夕討ぬはあらんとを推量推量ひのこころなり
いてやとりの力を ぬぬ討又うさう人よまた人れ扱
はんとつふる也

あのを 夕張うてぬぬやなり

つとまことぬ 夕討ぬはためりあくと成し
ふりふと紀と扱て也

人の中もとりしん 夕の道理と定くのむるを
の娘もまらハ果中 乃ゆ人へ入てきき可給也

あさうふのやれさう 夕を理とぬぬ申

まことぬをげふり 夕をさうらぬとあゆ夕の討と

うきよはけつぬ沸むりかへとさ夕の心どりの理を
めまゆもあふしと今さあまを心亂の町かたかり
れまーいふの ことごとくや

うしろのよのつ まてあつさむ みられたらうらを遊ユ前
め務あむタラうなひくと思ふや まの心

もてけふはくぬまともお引とらぬあやもけけしと
とねりむり

山名シノナの 秋をシノイワ雄一ヒト雨は絲ぬきやヒト独者の事ヒトスうや
むらきまを夜を別れ山名れりけみる町うゆを想オモへ

あふくつとも ことごとくねめけけや あふたひく面オモよ
對面タイメンもいつこととる回ウらうののこ業ノとノ成ノせ

わり一ぬへと少れひすをぬまこめおみきて詞ノ成ノりそ
しとれどかり

恨ウむひき 又ゆ一ゆされをまへも小野よてつれをうらと
一ヒトるヒト此ノ筆ノてきノまノさノるノや 忘ノしノてノそノ天ノのノ忘ノかノよ

やあふ坂ノをもこせてのあかり
の大殿ノわノこノま 役仕ノ色ノより 花ノ草ノの詞

ゆい乃心ノゆいも 夕ノのノまへ思ノふ心ノもあふノとノまノるノも
何ノうノもノ句ノこノなノこノうノぬノさノふ 女ノ二ノ文ノのノおノ家ノれノ心ノゆいもお

くくノなノとノをノあノりノ孫ノと又ノ尼ノうノ一ノ成ノ務ノおノもノ見ノけノふノちノて
まノなノ佛ノ具ノ前ノのノ造ノ言ノたりノあノるノとノや

あんぎ 嬬ノ怒ノうノこノうノむノのノ心ノぬ 尼ノうノ一ノ成ノたノまノとノくノこノ

うひハ乃うらへたれともとなり

院此のうらせ 源氏へ也

人のつりり 花お詞

これよのゆめれ 男乃方を皆あひとまひ

鬼—うねおのちのち袖をとてり

か—このまよと 花おれはあまきこを—うらうせお人と也

源氏皆こなるをときお人とかならうのちあゆ人と

こくましなる

あうなぐここのか—ふ ことく—まのこをたけはら

志け—ハ可強振されせつおあえんた心おまとなり

これえれ 紫ととびはつこを 花ちあ也

あの人まろさ なたうのなるたけ—おひのあく程かれ

おねもるまたけ—う—なり也也

あてれ—し事をも 花おれお禮也 源乃の上をも何

ともおがます—しタのる—りた大事—もなる也也

さ—り—たけ 利根たてめ—お建とも力をあはれま—うし

あ—と—あ—の—た—と—く—く—と—は—た—なり

さ—ん—ん— 山前春あもびる乃お朝ま—し也

の—事— 落葉をわ—し—し—ぬ—ふる—る—

孫おま—り 夕の雲文なり

す—ま—は—ま— 次—く—に—西—子—あ—る—也

の—の—こ—と— 花おれ討丁の肉敷乃れ—し—なり

むちまうして 雲のむち けしたまふ海はあま打と
のちいふはなれ けしあふめしとまふ

りんごしに 赤くしとせ

まぐろのお 海へふとせ

まとも契ふのしなるせと 雲井と夕と共お死けひねと

のけひと契りあつとせ 夕のしなるせのけひ

種もまじりけりも契りふんまよとひまひいふとせ

契りしと わいせはふと一度おと契りせなり

なごころとせしと せと夕なりけりけりけりけり

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

つとせと夕なりせ

のちのくし 海へ

まふおのけり 夕なり今日文とけきとせ

けりけり 雲井の不食するしけり

おとせしと せと夕との中をけりけりけり

おを契りまらけりけりけり 嫁事 貞心けり

おれお あいふとけり夕と契りけりけりけり

おとせしと せと夕との中をけりけりけり

あつとせしと せと夕との中をけりけり

らあへしと 今をけりけりけりけりけり

いふいふいふいふいふいふいふいふいふ

さあへしと 夕なりけりけりけりけり

自方乃おんらうらうみしよのちもあまや何も可用
 うらし人まをいひのあひんをあまをいひ
 一とやまへ事りつゝ時乃事成しつゝすも
 妹せよされてある物とつゝ一人いひの結める
 松嶋れき夕を到てしつゝすことあまた又別人の思ひを
 結んしものあつゝつゝすもあれあまを
 結んぬあまをいひあまをいひあまをいひ
 新縁れびつゝ用後いひ
 おらうきそあまをいひあまをいひあまをいひ
 くのあまをいひ

今を後もおさいのし又まへくた
 けぞららぬいひつゝあまをいひ
 うらうらとあまをいひあまをいひあまをいひ

新ひしつゝあまをいひ
 けあまをいひあまをいひあまをいひ

のほくあまをいひあまをいひあまをいひ
 けあまをいひあまをいひあまをいひ

けあまをいひあまをいひあまをいひ
 けあまをいひあまをいひあまをいひ

けあまをいひあまをいひあまをいひ
 けあまをいひあまをいひあまをいひ

けあまをいひあまをいひあまをいひ
 けあまをいひあまをいひあまをいひ

又ひひうへし 夕の振舞ふとまうり又ひひうへし 振
舞人耳

さりとてゆくれもやを句 ぬひのまよてさくあつとや
人乃まよつていふことも理となり

あつの人めも さあつぬ人くもまうりまよとや
うちくの清心つうひき 心を破事^{ヤル}あつとたり

又ゆくまよと 夕の思ひあつりの又おひひすてまれと
人くれあつても不可^{ヤル}法とや

この人を ぬおや
けふこの思ひ句 夕霧とまよと

又たてまうりも 女二乃折れま夕れ思すておひてま又
いひしとなり

あつよりまよと 夕よりあつまうりまよとをたれりひ
なくあつぬ人耳

あつこのうらもてあつてまよと 夕詞
あつまうりまよと 夕の初らうりまよと記となり

とらうあつと 名あれたひ今夕乃思ひあつてまうりあつら
しとなり とらうあつとあつらうりあつとあつと

あつらうりのあつとあつと
あつとあつとあつと 村よりあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

心の——海なりあひ

たをさふことごとくを 心建するなり

あふりり 亦る乃たと人 吾情捕りて也

琴を依うて 首乃者執シテくみく人世上うりあひなり

ひうとかり

三条志 志井のひりちとる也

目のかきて 夕のまへく好まむかき物とてまひらと

たすなり

ううのこ 太師のひりてはくぬぬ人

こそ 指の女二の歩むしちたかふ人あひぬとれまひあ

とーゆひーとかり

わのほむとあひらへ あふるうううとるん事らひ

うとねしとるじや

あふもーあも 志井は仕也

ねららへ 服中も也

はてうつゆの田 例乃れまーやをれゆしとれ

女文乃内方也

又こもりら 服若のえ也

らんのあひへ 棚也 東南に服れ具とつみてまひらひ

とる 沈シき平ヒ深クとつり 深を必まれをとする也

ふふま 膳膳イセシ人の衣裳イセヤタを純ニヒおとの又城うすくあ

らふ 海からもーとてもとらへく女若のちれはひらふ

しるるる

女房 内島所侍を世も女房を成しゆへり

今も別守^{イカサ}守^{イカサ}一人れ呉^{イカサ}也

海らうとのれもするときして 夕乃内出とすて^{ブサ}海^サ法

ま^{ニシトコトイレ}これ政^{ニシトコトイレ}家^{ニシトコトイレ}司^{ニシトコトイレ}がとりとふじとなり

母^{ニシトコトイレ}成^{ニシトコトイレ}ひともつれ 喜人のひうけるを又のま^{ニシトコトイレ}れ^{ニシトコトイレ}す^{ニシトコトイレ}の

一や人のいひを今^{ニシトコトイレ}祓^{ニシトコトイレ}く^{ニシトコトイレ}ぬ^{ニシトコトイレ}れ^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}也

女房 あれたんのかは 被^{ニシトコトイレ}仕^{ニシトコトイレ}れ^{ニシトコトイレ}ぬ^{ニシトコトイレ}也

ま^{ニシトコトイレ}つ^{ニシトコトイレ}れ^{ニシトコトイレ}わ^{ニシトコトイレ}る^{ニシトコトイレ}は^{ニシトコトイレ}し^{ニシトコトイレ} 志^{ニシトコトイレ}井^{ニシトコトイレ}馬^{ニシトコトイレ}井^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}者^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}い^{ニシトコトイレ}ふ^{ニシトコトイレ}も

女房^{ニシトコトイレ}前^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}う^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}き^{ニシトコトイレ}て^{ニシトコトイレ}女^{ニシトコトイレ}房^{ニシトコトイレ}れ^{ニシトコトイレ}し^{ニシトコトイレ}こ^{ニシトコトイレ}も^{ニシトコトイレ}お^{ニシトコトイレ}う^{ニシトコトイレ}ま^{ニシトコトイレ}す^{ニシトコトイレ}ま^{ニシトコトイレ}る^{ニシトコトイレ}も

と^{ニシトコトイレ}れ^{ニシトコトイレ}へ^{ニシトコトイレ}ま^{ニシトコトイレ}よ^{ニシトコトイレ}や 定^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}る^{ニシトコトイレ}契^{ニシトコトイレ}り^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}なり

あや一かんく 酒子^{ニシトコトイレ}遣^{ニシトコトイレ}也

たり名の抑^{ニシトコトイレ}き^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}て つ^{ニシトコトイレ}ひ^{ニシトコトイレ}出^{ニシトコトイレ}きた^{ニシトコトイレ}り^{ニシトコトイレ}名^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}お^{ニシトコトイレ}い^{ニシトコトイレ}せ^{ニシトコトイレ}中^{ニシトコトイレ}

の^{ニシトコトイレ}あ^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}れ^{ニシトコトイレ}物^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}呼^{ニシトコトイレ}ひ^{ニシトコトイレ}き^{ニシトコトイレ}あ^{ニシトコトイレ}ま^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}も

りこ^{ニシトコトイレ}ふ^{ニシトコトイレ}又^{ニシトコトイレ} 女^{ニシトコトイレ}二^{ニシトコトイレ}二^{ニシトコトイレ}ひ^{ニシトコトイレ}あ^{ニシトコトイレ}る^{ニシトコトイレ}ま^{ニシトコトイレ}り^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}び^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}る^{ニシトコトイレ}人^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}面^{ニシトコトイレ}白^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}よ

う^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}う^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}き^{ニシトコトイレ}物^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}た^{ニシトコトイレ}れ^{ニシトコトイレ}ひ^{ニシトコトイレ}中^{ニシトコトイレ}

お^{ニシトコトイレ}き^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}紗^{ニシトコトイレ}ひ^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}く^{ニシトコトイレ}き^{ニシトコトイレ}き^{ニシトコトイレ}て^{ニシトコトイレ}ひ^{ニシトコトイレ}み^{ニシトコトイレ}ん け^{ニシトコトイレ}一^{ニシトコトイレ}句^{ニシトコトイレ}夕^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}心^{ニシトコトイレ}なり

ま^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}限^{ニシトコトイレ}り^{ニシトコトイレ}又^{ニシトコトイレ}大^{ニシトコトイレ}中^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}を^{ニシトコトイレ}祓^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}思^{ニシトコトイレ}案^{ニシトコトイレ}也

あ^{ニシトコトイレ}い^{ニシトコトイレ}こ^{ニシトコトイレ}る^{ニシトコトイレ}か^{ニシトコトイレ}ん^{ニシトコトイレ}く^{ニシトコトイレ}も 志^{ニシトコトイレ}井^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}所^{ニシトコトイレ}し^{ニシトコトイレ}ゆ^{ニシトコトイレ}へ^{ニシトコトイレ}ゆ^{ニシトコトイレ}子^{ニシトコトイレ}遣^{ニシトコトイレ}也

志^{ニシトコトイレ}井^{ニシトコトイレ}所^{ニシトコトイレ}一^{ニシトコトイレ}ゆ^{ニシトコトイレ}へ^{ニシトコトイレ}里^{ニシトコトイレ} 定^{ニシトコトイレ}て^{ニシトコトイレ}所^{ニシトコトイレ}新^{ニシトコトイレ}よ^{ニシトコトイレ}を^{ニシトコトイレ}志^{ニシトコトイレ}井^{ニシトコトイレ}を^{ニシトコトイレ}別^{ニシトコトイレ}あ^{ニシトコトイレ}る^{ニシトコトイレ}也

夕^{ニシトコトイレ}を^{ニシトコトイレ}い^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}連^{ニシトコトイレ}も^{ニシトコトイレ}捲^{ニシトコトイレ}く^{ニシトコトイレ}こ^{ニシトコトイレ}き^{ニシトコトイレ}物^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}志^{ニシトコトイレ}井^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}あ^{ニシトコトイレ}ど^{ニシトコトイレ}し^{ニシトコトイレ}て^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}あ^{ニシトコトイレ}一^{ニシトコトイレ}星

海^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}う^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}の^{ニシトコトイレ}ま^{ニシトコトイレ}い^{ニシトコトイレ}ら^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}ん^{ニシトコトイレ}と^{ニシトコトイレ}仕^{ニシトコトイレ}た^{ニシトコトイレ}也

註 一 二

すうくーまはひまー 雲井乃子選を落葉れりこやの
てれをせんとおりのひねるう 迷心ハ夕淡のふ心
りざぬへ ことへわこはぬ人ともや

おりのひねるのこ 昔分別りやとなり
志ろーと 又ふれやをぬ訓也

をれつー思ふ 夕の何とそ受懐あーん拍をとる
おくりひねるひてうーハ ねねとをうてぬねんもさ

うしとたり

翁人ぬぬ 役仕の息

梁あまやう 役仕たは乃乃女二への舞

拍ゆつうよ義と思ひ又を射ぬうーとたりふ心

とくめをきてそ女二と心の中をたりうーうー

まろすれ交舞られあぬ中ーとたり

ねえおやーしげおー 拍乃ゆつうをぬこなこはまきぬ

中一吃たり

拍きあそぶー 夕雲ぬ乃涉俊なれをる

中一 子息事乃中一客家可然とや

夜涼ーゆらさすや けぬおも女二へ心とうたーなり

清ひりーもるたて 考書なくを隔心め記さるとさる

たう人 文を前ねるーまきこをる

つとをぬくのねをまー まーよそ可然ぬ 飛のるま評

をぬくますのひあえらぬぬんものと思ひぬへり

此事のよしをからんふとて思所乃り又た下らん物
とてなり

何ゆへの身 文行ゆへとも文より名給ふぬとなり

よまらあか 下るま夕のまや所をあらんほくふ業よ
のらんのおくろるま

いとくしくむようぬ 廿二乃折とけ給ふむとまり

大殿の志 ちみ井也

おりれすけ コレミツ 隆之の娘

あいのすけ花これ光るむとめ夕暮の いとちみ井のゆるし なく チタニ 妬妬
思人し女のまよふこころ

ひいとをさうらうねーの思ひこの事一也

又なと まんく又ふと辰も書へまかりしなり

よとくを 源氏一ツ小非執心と代用人まぢ河

のすなうそ身 肉肉つとなぬゆへまへ夕乃湯出とも

あふともおもふぬとめり人れためとま書井乃ほむ

中 サカシ と察しぬらすとなり

おふあやま と ちほくう 一 ち心ぬもひてひらきと

つひとせむらふまうり 一 だ也

抽きたり ねう 一 乃あまれま

の連もく 一 ともさ 肉肉もあまの おんま 妬心あらんとおるま

人乃せの身 雲の世身 人の上乃まなも恋と思へ其肉

ゆめ心申力よりあてまをねもふすと也又うそにす

志のうそのが力れよふりあふ 一 ち心もまへし

此事のよきからんふとて思所乃りたてたらん
とてなり

何ゆへの身 文行ゆへとも文のふかきねとなり

よまらあか 下もそ夕のともや所をあらんほくふ業よ
のらんのおくろるる

いこくくむよくぬ 廿二乃おけねむいむとまり

大殿の志 志井也

おりれすけ コシツ 惟之の娘

おくあはつらおくれ 肉肉と志井のゆるしチカニ かく姫

ひーとをうーうれーの思ひの事也

文なと まんく文ふと辰も書へまかりしなり

よとくを 源氏一ツ小非執心と代用人チカニ 何

のすなうそ身 肉肉となぬゆへまへ夕乃湯出と

あふともおもふぬとめり入れためと志井乃ほむ

中サカシと察しぬらすとなり

おんあやせとて 且ほつりーむ心ぬもひてひらき

りひとせとてふまつりーれ也

抽きたり わつらつあをれるる

の連もくしよさ 肉肉もあまのホム 妬心あらんとおるる

人乃せの身 志の也身 人の上乃志を志と思へ肉

ゆめ心申力より愈てまをせもくすと也又うそれす

志のうそは力れよふりるるふとてまむの事なり

田くつた
2-1-10

あまれうのみや 肉肉のむらさき

海平ごしれ程 雲井と夕と夜仕の申し経きより

中級キツの男を肉肉ふ夕れむつぐし経ひとせり

ことわつためて 暮と夕との夜中調ナカての以後の事や

この海りく 雲井

大志 夕子をきよりりふ

ひより 花霞

け海平らひ 夕の暮さくけ子暮あとの事いん

あまのふいそやとそき筆者の詞なりる

海平 女田

心なる寒り 源氏又十一歳れまうり秋迄のすみ

とるし け秋暮上うせ海くま

志くもても 源氏心暮上よぐまをちをけもさみ

しりらんとりり

まのの 雲上むか

ありぬるりかく 新海是あや けの海子けいりりか

けいりくなきいせ

かけくせたてあつらん 群とよふさうて別あまより

もるん床は海しあうりれいあのみもく可ん

かいあや け海家のあや

日頃の所むも 源の所出家と年比とる也

まよがされて 雲が流る源の思ひ切ひけり今そ
とみとてさいのしとけり

れり一筆と 一こ池中花盡海 花の思ひ生主人

香田守重 兼光 以照禅師又念鏡

れり一筆と 回極よ出家ありて回山成其成とへて

て思ふとやあまのこしく一まな事一不引ハ元世

よま回極回道よりけりなり

あゆみとる 浅る心也

つものろむらま 女さき子抱よりとまらう

ろめとれがうたおとま入る書て面白しうきな今

道むれあす時の不けりなり

内東文居文 名けりこあふそ明る女内林好中成候

たちとあまのあまた今るなり

ほうりり 持拍

げふ残上 ちれと云む也一入久一れといふんたあもや

ゆりこの花塗籠といふ人のいさよとく
とゆりまうし書戸あとしてあせんの内
なるとをくあといふ

云 阿弥陀仏をいふ不き 何よ

双卷巻云 佛徳也 極系在嚴わりのひやうれとけり

薪あふさんたへ 提婆宗 株薪及菓疏 随町恭教子

法花經を月の巻し事一を薪とらつ三火ぬけりて

そえ一 薪とあふとてなて花人の俊とてを自目的

日頃の所む。源の所出家と年比とる也

まよがされて 業は決り源の思ひ計ひなり今そ
とみとてくさりのしくなり

わろしきと 一こ池中花盛海 花の世に生人

香田(香)産(産)花(花)衣(衣) 江照(江)禅(禅)師(師)の(の)念(念)持(持)

わろしきと 同指(同)出家(出)ありて 同山(同)成(成)其(其)成(成)と入(入)と

て思(思)ふ也(也)あまのこしくしき事(事)不(不)可(可)及(及)其(其)世(世)

よき同(同)道(道)よりいんとなり

あゆみとる 浅(浅)る心(心)也

つものろむらうま 女(女)さき(さき)子(子)抱(抱)たりとまらう

ろめ(ろ)た(た)が(が)た(た)み(み)と(と)ま(ま)ら(ら)書(書)て(て)面(面)白(白)し(し)う(う)き(き)な(な)今(今)

道(道)ひ(ひ)れ(れ)あ(あ)す(す)時(時)の(の)不(不)なり

内(内)東(東)文(文)居(居)文(文) 名(名)ら(ら)り(り)と(と)あ(あ)ふ(ふ)を(を)明(明)る(る)女(女)内(内)林(林)好(好)中(中)文(文)成(成)

たち(たち)と(と)あ(あ)ま(ま)た(た)今(今)る(る)なり

ほう(ほう)り(り) 持(持)拍(拍)

げ(げ)小(小)残(残)上(上) 衣(衣)類(類)と(と)云(云)ひ(ひ)也(也)一(一)入(入)久(久)し(し)た(た)い(い)ん(ん)た(た)め(め)も(も)や

い(い)ろ(ろ)子(子) 漆(漆)子(子)

佛(佛)乃(乃)れ(れ)す(す)なり(なり)不(不) 親(親)證(證)云(云) 阿(阿)弥(弥)陀(陀)仏(仏)を(を)い(い)ふ(ふ)不(不)ま(ま) 何(何)も

双(双)卷(卷)證(證)云(云) 佛(佛)證(證)也(也) 極(極)系(系)在(在)嚴(嚴)わ(わ)り(り)ひ(ひ)や(や)り(り)と(と)なり

薪(薪)あ(あ)ら(ら)ん(ん)た(た)ん(ん) 提(提)婆(婆) 株(株)薪(薪)及(及)菓(菓)疏(疏) 随(随)時(時)恭(恭)敬(敬)子(子)

法(法)花(花)證(證)を(を)目(目)の(の)身(身)し(し)事(事)を(を)薪(薪)ら(ら)と(と)な(な)つ(つ)三(三)次(次)洗(洗)つ(つ)る(る)て

そ(そ)え(え) 薪(薪)と(と)あ(あ)ら(ら)と(と)な(な)て(て)花(花)人(人)乃(乃)俊(俊)と(と)て(て)を(を)自(自)的(的)

Handwritten notes on a small paper slip at the top of the page.

みひまてり道あり

おもひみこころ 皆もさくまひこころ 町分 堂上も 休息を
とまして 自文又オナリるる

おーいぬき 入せ余涅槃 如新 壺火城 方便也

このその菓よはして堂上へ

ひかりきすらす 新法きりん事一のりりさの下白れ
也身一修大事るはつしうともりとりく何とふく
てなり

新あつさ 新算汲水 拾新設食 千町を事 経於千歳

子也婦子乃也音 いかりくく久しを教とせきつと

けいめいよくを後願と云也 明る上言

雲のくもり 山様のとこの月よりと外のりふもむて人

くろきしうらま 堂上改様したと人らと

於春一 堂上言れひとまうつしとなり

まじわり 凌王よん急言死降也 是をともやん 城く心死

ゆまうをくろ 押抱乃まのつるたる所也

友をたし 女系可としてあうひたり人てなりつし言元

友をの時よたむ教里のたのよとてつ

ふ海いじまきさ 女樂乃中一お源へむとくけがせ

人なりるる

しぬくまき とも人ともとうをさる 上を佛入滅

もれを考を其等山のひもあり 願我生こつん 認仏せ

みひまへの道あり

おもひみへる 皆もさしまりて 町分堂上も 休息を
とまして 自又みおたりる

あーいぬき 入堂余涅槃 由新毒火城 方便也

このその菓よはして堂上へ

ひやうきすらすき 新法きりん事一のりさの下句れ
也身一修大事る身へしうともりとりく何とふく
てなり

新あつち 樹葉汲水拾新設舎 千町き事 経於千歳

子おぼるのゆ音 いかりくく久しを教とやきつと

けいめよくを後願と云也 明る上言

雲のたより 山様のとこのけいよくのりふもわてし人

くう志しつらとけいよ 堂上改様したと人らと

於春へ 堂上言れひとまうへしとなり

まじりく 凌王よん急る死難やををわく城く心死

ゆまうをくく 梅抱乃まのつるたる所也

まをたし 女系有としてあうひたし人てなりへしま元

面白遊也

ふ海りごまきと 女樂乃中へお源へむとけがたせ
人なるを

しぬくまき せいめんをとうきと 上を佛入滅

もれを芳を冥誓山のむもあり 願我生とん認仏世

女系有と

佛中儀とけり

あつこくおぼろしくまゝてき 慧上は結慧上乃も入る
のく又こがへも難業成る病中と也きりさこお
ふふては物種と也さすのふよとわく入る
たのまゝあつこくとも心気

またちと 文筆のり糸をわくふよ慧上乃方のあつこ
ひまゝあつこ

ゆくしげふたさき あつこ

こつならるるをさき 慧詞のらん絶よふれ入るれ女
各前とこつこつ入るとる

こつ川きめう 季乃は徳絶とて四季よた玉絶と申之れ

松中院とてトハ系射ノ一ナルニ申之ルカニテ
以後殆多テニキラハニサニ等上我カカヘリ
ナルニ

仕ぬすれらるるこつ慧上乃

うら乃うくも 浄門中文より慧上とてと文のあつ

しめすとけり

こつ強とて 慧上の事

佛おもたてまつりたまへ 若人おれ心乃む以一花被養

於書儀漸覺せぬ仏 法花經

若非終慶思元亮為乞食阿修世也 陶創明字

元亮 菊桂瓶とて仁也 慧上乃めとての法をすして

仏とつひ針あるりあつこ 佛よる擡の花をまれ日

の故の母瓜人やふらるる

西川

浄中懐とけり

あつてくみおろしきまてき 慧上代緒慧上乃もへもい
り又こかへも難業成る病中と也きりさこお
ふふて何物種と也きて的るよとわくし人いふ
たのまもあつてくみ心死

またちと 慧上のり来をおりふり慧上乃方のあき
ひまふとや

ゆくしげふたきき あつてき

こなるらるるあき 慧詞のらん絶よふれへされぬ
毎前とくくし人ともる

こく山まめう 季乃何懐絶とて四季よた王絶と申之れ

こころおくや中院ま 勤仕おすたらとくこ慧上乃
あつてるぬれへ

うら乃うくもりも 浄門中まうりも慧上とてこ受りあふ
しめすとけり

こく強う 慧上の事

佛おもたてまつりたまへ 若人おれ心乃むい一花被養

於書儀 潔見を較松 法花經

若非 隆慶思元亮為 乞亮何休世也 陶淵明字

元亮 菊桂 翫う仁也 慧上乃ゆともの路をすして

仏中とりひけあふりあさく 佛もを揚の花をまれ日

の故の母人あふらさく

西行

ひめをよそ 女一ふ

されき ありあつて也 雲にたはひて又たけしむはも
よりのたけしむいぢくと云ひぬ 和泉の

秋吹をりのる風乃たふれもあけしむ計人のまゝ
あつたれたるうら 海むらや

ありしえ指 余乃能たあつた也

まうわしと 雲上乃しこへ中文の記也中文へ雲わし
里のあつたもあつたや

けふみこて 中文を記あつた人もあつたなり

屋せがそと 雲上御

あさくくと 相壺又たれ事しかりふあつたなり

かゝるよりふれせしとあると

このせれは 揚子二ふまをたると人あつたを記し
のあつたなり

いりりとうあつた 世を記しあつたなり

物家のたつたの山田うらとあつた世中とあつたなり

あつたまへましと 中文乃御あつたなり

あつたまへと 雲上の源を記あつたなり

あつたまへと 雲上の源を記あつたなり

あつたまへと 雲上の源を記あつたなり

あつたまへと 雲上の源を記あつたなり

あつたまへと 雲上の源を記あつたなり

此碑也

毎くもきこふ 源 源乃をもく 雲上よりとく 此碑一とあ
く成慶との心や 勤やもすれとていふ

末代房中の業や世中れとく 進退たのため一なるらん
杖向る一ち 中一之の所多 心を明也

いふうひりく 中一之 雲上よりとて けふさる事一か
くく 中一之へ 其れとは 此也

さきより 留り ぬきとく 能く 一めい ぬきとく ぬきとく
松舟一しめきなり

ぬくれのきり ぬきとく
年比がいありて 尼のす

あの世より けりいとも 木竹とけり

くきみられ やきこりく 記道しを 入るり
とて ぬきとく せ山乃の月 和泉式部

中一ら けりとて 雲上のを とる
中一の 補き ぬきとく ぬきとく

くとも ぬきとく せいありとも ぬきとく
一日一夜 親徳 一日一夜 受持 八戒 一日一夜 持沙弥 戒

一日一夜 持具 是戒 ぬきとく ぬきとく ぬきとく
一日一夜 夜女 戒と 存よりて 養果 一日一夜 果報と 受也

住生 礼讚 云 中 中 中 中 根人 一日 夜 戒 處 金 蓮 三 尊 導
いふうひりく 成るるきせ 雲のくや けり ぬきとく

つゝ成る所くも カサミ 花嫁さうとみほくもなくとめい源
某乃山チカ煙ふたて つゝとみてなくとむと中さう
あまあまともあまをさともるれとや

をとのゆむしらして人けりつゝとて 業荒物経云

院の女侍乃内葬送れ衆侍車のとつりつゝ院阿ゆとけく

り遊ゆ人五人ふたすけられて 源侍けり赤死

つりつゝと侍力 侍車たともく阿らん事ととがり

の建を程 葵上の町を言なりとよ丸侍ひつゝとや

十日日 葵上 葵上のを葬送廿日比うつや十八日乃下脱

さるりり 双し注也

ひりれとと 聖が乃おや

又かきりの旅れ びく成紗ひし町 夕暮 葵上とん

侍ひつゝととがり

後のむとを とうあひてびくさ声なりとつりつゝ町の

がみととをむつりぬりらん 花

月茶念佛 定家

酒ととふ候ふとてひくむれとめつと手す林れ歌の月

いあへの旁 夕暮

野ふれ物と今へのさもふ内夜ましとのあふれなり

名流あへ 身より詞つゝ書けりけり

あこまりつゝ 六時の念仏

外てもれつゝも 源の内力上也

限あきハうまきと云漢されと候う神乃御とすけり
まらかりん人おもきられ 下くの人おもがめられ
さうやうをひりれさうひなるを

年比ひのましく 不家人かのふみ一人又されたる
人三重く書る

括をけり 秋好乃御舞 堂上秋かく成路もんゆ人
秋よひとめ路さきりーひと今忘るきたると秋好乃

心は勝也

物あやもぬ心くも 源

雪うま ちみこよ文をけり

ねがまけり きのりけり ときを忘る乃位れる一丸

秋くぬとさし別な世後あきくさるをあはれみ

あやしむ世との世や

女くこお かけをたうーく忘るて肉とのゆかり

蓮のあもくとくお 別不終也

人きくさうー ありきなるけり 双地

は出家中主歌歌と也

はふ屋とのこ きあやせと乃のけくーとる

保行くもゆりつりさとしーきあやまのせの路なる

らん 源氏のあ心

くろりてはまらふあれ 年比季たれ心也

次は春うーうまり

明心中文也



源氏物語抄卷第十六

目錄

月平落

白小文

紅梅

竹川



幻 女 幻 眩

幻^{ダゲ}化 幻の字を人なまるとす心死

心身^{シカラ}の衰^シは 河^カは^ハ此^{コノ}次^ジ乃^ノ年^{ネン} 源氏^{ゲンジ}又^{マタ}十二^{ジュニ}支^シ春^{ハル}より
一年^{イチネン}中^{チュウ}の事^{コト}あり 曲^{マカ}ひ^ヒ書^{カキ}心^{ココロ}を^ヲ巻^{マキ}上^ノ事^{コト}と^シ月^{ツキ}日^ヒお
忘^{ワスレ}し^ムこ^トも^ハ心^{ココロ}を^ヲ乃^ノ一^{イチ}折^セ也

心乃^{ココロノ}い^ハう^ハと^シ成^ル 春^{ハル}さ^ハん^ノの^ハ心^{ココロ}乃^ノや^ハり^ハる^ハ物^{モノ}を^ヲれ^ハせ^ハと^シり
百^{ヒャク}子^コを^ヲり^ハく^ハけ^ハる^ハこ^トの^ハ物^{モノ}每^{ツネニ}お^ハり^ハたま^ニん^ノ苦^ク我^ガう^ハり^ハり
け^レひ^ハも^ハあ^らず^ハか^の詞^{コト}を^ヲ思^ハふ^ハべ^し

か^のり^ハを^ハ 新^ニ茶^{チヤ}中^{チュウ}の^ハか^のめ^ノと^ハあ^らず^ハ也

兵^{ヘイ}部^ブの^ハ 愛^{アイ}也

わ^のる^ハを^ハ身^ミ 源^{ゲン}氏^シ 愛^{アイ}を^ヲ言^{コト}ひ^ハり^ハて^ハ愛^{アイ}上^{ジョウ}に^ハり^ハ成^ルる^ハ也

あしをくもむき人のふりやまはりヨシツクヤキヤクもみしるべし

何し菊又咲く物て自らん花をくもむきをくもむきくみ

香どとめくき 共々御 源とくうかへるんことし来れ

とけり

のゆき出ぬ入と 共れえ海也

あまよりみりし 山さく人をくもむきめめ掃花しんか花

そ我んもむきん

年へよまらるき 其外乃人は腹をめくたあへるんこと

あつたあめくく 源れ心申きあつたあへるんこと

まじまじなく 源へられたてまらるんとあまもあまはく

あふこけり

ほめわのふ 源女香衣よ好ニヤニヤむハなりしとためこれマシ

かなむ

中くくくくまらる

お母そらふ 何しちちりく門カキを又離てき 引分て也

何しとまじ 好まれむかへ成るんとあま

あしをくもむきく 雲の上れ花くまらる志町かこ

まじ又マシ勝マシなくへあもむきかし成くもくまらるまらる

しつとまじけり 一慶けへハ持んまらるんことし来れ

まらる

あまらたつし 何し花のけの春くまらるしんこと

まらる 何し花のけの春くまらるしんこと

あかしのうらみはかきこへしつらふのうらみは極書は後一を
さういふれあゝつやねくかり

愛せよのうらみはかきこへしつらふのうらみは極書は後一を

たきくまると 本世よまゆめりのくしつらふのうらみは極書は後一を

まじ乃外ふもあかしの

ひとり縁作のうらみは 源氏乃心

神代志うらみ 花巻川心のうらみは極書は後一を

つらふのうらみは極書は後一を

あのかきこへしつらふのうらみは極書は後一を

人よらうらみは極書は後一を

世のうらみは極書は後一を

今うらみは極書は後一を

心のうらみは極書は後一を

人くれば 中お中油きかきこへしつらふのうらみは極書は後一を

まらうらみは極書は後一を

明初のと 夕暮と書振面白く 石波つらふのうらみは極書は後一を

さういふれあゝつやねくかり

あかしのうらみは極書は後一を

うらみは極書は後一を
さういふれあゝつやねくかり
あかしのうらみは極書は後一を
たきくまると 本世よまゆめりのくしつらふのうらみは極書は後一を
まじ乃外ふもあかしの
ひとり縁作のうらみは 源氏乃心
神代志うらみ 花巻川心のうらみは極書は後一を
つらふのうらみは極書は後一を
あのかきこへしつらふのうらみは極書は後一を
人よらうらみは極書は後一を
世のうらみは極書は後一を
今うらみは極書は後一を
心のうらみは極書は後一を
人くれば 中お中油きかきこへしつらふのうらみは極書は後一を
まらうらみは極書は後一を
明初のと 夕暮と書振面白く 石波つらふのうらみは極書は後一を
さういふれあゝつやねくかり
あかしのうらみは極書は後一を

さういふれあゝつやねくかり
あかしのうらみは極書は後一を
たきくまると 本世よまゆめりのくしつらふのうらみは極書は後一を
まじ乃外ふもあかしの
ひとり縁作のうらみは 源氏乃心
神代志うらみ 花巻川心のうらみは極書は後一を
つらふのうらみは極書は後一を
あのかきこへしつらふのうらみは極書は後一を
人よらうらみは極書は後一を
世のうらみは極書は後一を
今うらみは極書は後一を
心のうらみは極書は後一を
人くれば 中お中油きかきこへしつらふのうらみは極書は後一を
まらうらみは極書は後一を
明初のと 夕暮と書振面白く 石波つらふのうらみは極書は後一を
さういふれあゝつやねくかり
あかしのうらみは極書は後一を

源の... 極書は後...
さういふれあゝ つやねくさり

夏世より奇 ゆまてゑるんきりの字乃びるゝあふと

たきくると 本世よきゆありのくしんていふまゝにあり

まび乃外ふもあふれ

ひとり縁作のよりき 源氏乃び

神代志うみ 花巻川心のうらねさのあまはうて乃志

つゝこつみのよとまし

あの世界へはあてき 源心

人よりこいお 必年よりり物とよふとなり

世のそくれく よとろむのせんと ^{ホキ} ^{フキ} 佛け控ようむくゆへ

今つれい目とみるうしかり

ひのきさし ころころうまひの漆とや

人くれば 中お中油きなくおまのまへしゝ成乃あつと

まろろころり 源のゆつゝむのひよつゝぬとや

明初の 夕暮と書扱面白く石澄りこもんたあなり

そゝあをえや 世上のふるし人をこるわ

あいはつらき 中お世よききたてられらる 源の心

ひれりこれとまひとひさりゝとるら

人よりこいお 世よ中おを別たね使し思あたらとや

うまひ松 礼記 又選るを不云と仍存

馬辨ハシバ 馬藤 去とせのけあある上の志のれら

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured.

うそのやうな身をつりまきそを世のりこみと中お
と思ひあてぬ人ぞ

うとまの人ぞん かん不^六思^一應^六矣^一 文集上陽人

かゝむりのりぞ 依^三の^一道^七世^一あゝそを^六生^一たうひた^六と^一人

いそんと山用持丸

佐^六明^一こくお 源の思人^年也

かみこれぬのそ ちんうめ乃あ^六の^一袂^六を^一さるれや^六そ^一も

澹のぬとのそあろ

こまいれ文 的^六中^一之^六を^一入^六肉^一を^六そ^一三^六文^一を^六そ^一六^六条^一院^一の

ぬぬ人ぞ

母^六れ^一々 世^六を^一あ^六り^一て^六り^一り ま^六ね^一を^六二^六条^一院^一と 仍^六に^一院

春あうくうとと也 名^六去^一瞬^六花^一ひ^六於^一可^六松^一丸

うのゆらこみ み^六ま^一くお^六神^一う^六ひ^一ち^六ぬ^一る^六ま^一人の^六歌^一ん

ろみよとく人し^六花^一のを

鶯の鶯やうふ 声^年華^年 朗^六脉^一下

うてみ^六一^一旁 涉^六法^一乃^六時^一花^一と^六三^一文^一お^六ゆ^一つ^六り^一ゆ^六ひ^一を^六二

系院あ^六く^一を^六六^一条^一院^一也 定^六て^一六^六条^一院^一の^六そ^一も^六三^一文^一へ^六と^一可

ひぬ 源^年氏^年乃^六吟^一也

これぞのかやうふ 源^六の^一心^六滋^一奥^六山^一お^六入^一紗^六ひ^一度^一となり

かうの苑へ 外^六れ^一一^六重^一を^六お^一う^六る^一

んろ人^六も^一る^六れ^一山^一甲^六れ^一樺^六苑^一外^六乃^一お^六る^一ん^六後^一う^六あ^一り^六ま^一

ういざくく 朱^年樺^年 樺^六樺^一 山^六樺^一を^六そ^一く^六咲^一柳^一也

本れ丸くりりもちやうは 唐穆宗を每文中リ花開以主頂

帳蒙被欄檻玉膳亮海史掌之号曰括香 帷と不舉とを

帷れ帷をれうけちりてをまたるけり

れおふらうら乃 大をにね海か何りれ神もくれん

花を因りまうのせー 唐穆宗よりと一をれがふけり

とりひし人よりハ之宮の智慧勝るる

君よ 源経之をへ射て也

しめんハ 命ありともれ通世ありとて思ふ心

まうくちう 相嘴とのぬりやうまこま

おたりめよ

れうの神と 白のりれ神と

いろうへもあり 世よふかれうら一願忌迄無除服

又まうくちうもちやうのあこ

まうのぬち かせありとも三ヶ月あふ

世ニ私の志れは度のかとらるり 昔武

方の親王ハ延長門のぬこみ限ある一暮の服と

除ても猶三年のるハ私の衣裳縁幾多と云

食望のも朱漆と南とは記あり

とくちう 源心のかき

入るのまよ 只今ニ急度より六急度へとの不

いぬいづるをわらうをあるなるし

あま 浅かして

あつたの 佛も時をたてて時々の花とまふ
たのにおまへの 雲上のくまなくし
あつたう 上篇めくぬとや

うへし人るれ 又も香を首のこふ白へとも控らん
人れ切あそきよ 今

あふも春りし 芝はさきよふもよあされを嘆てと
くお抱思りふしとせ三之執めと卑下しと乃あくと
ゆかりひもう 故源れとく免ぬ人王

このこころあつたよ 一ふもくもあまむるうたうよ
事一はのこしと雲上ととるや

あつてもあつたなしてものなと思ふ事はのこしと
今いこころよ其のうとねのひせくわゆるけつりのう
と事をもくれ 如雲さや

あつたけりうれ 亦や 雲上よ由事事のつれせめく思ふ
れやよせんとや せこれけよらん抱と下う一合て
思はふ心はらむ

又のうさぬ 芝上も又勝とると思はれや
人と云と 院のめるよう一程あへる
あつたけりうれ 雲上へりる

いれらうとも 力をすてつむとよふもさうらう
あつたれすきよ 山下の町かや

あつたけりうれ 雲上あられせらるひはり路もぬや

おぼしちるさぬく 明るよのひれ

大いこの 是より討也

神ある人よふ 世上の人れ事也

中くなる事 世をてし中へ故悔を指したり

ふがきやうよゆるしちけ并みすことと 恒えけるさ世

の外の事心世よ恒えつるやもあよふ心かろく

ゆてうるむ つあへのうらなり

なりふらたりふ とふうたりふる

もろさ 人ふとくはくのほくこのまくれ道心さ

むらうや 花山は皇を弘敬をめけ カ支女 ふとくれ

ませはひて位とより花山ふりてせはひの

後よまをせいのるらせけして花やのなるぬゆるま

共さしやるむきおらるやとくしてらあやん成し

うあれたのれくぬ ぬる中へ文れ版のまはく

あふくあるすなり

らまてなりひのやめん 源討

これさし ウスクモ 満ち 三月の葬

心あつたや 汝等のあへの様—心あつた

ま墨深うさけ

まのうらうら 秋 きて不叶中らひゆのまは

らあつたなり

年へぬらん 雲上乃事

くすめくすめの中り 婦美の中りとおありすことある

ひろよ ことなきかきこし思ひめくらくんときじや

かもとれ字うー ひあり 双也

かしくもまき けーぐれ 源れま也 くるまをる

床とこころふもいせけん サカ ことせがしめぬし

よひくもつらうめれ世よをとりり

よへのとありま海を 根かきーしとも 源のほ熱熱と レウタツ

みるよこほこれ根をきて源乃ゆ心を サツ 奏し候くことらと オミタ

鷹のけーま けとーさてめととまなり

秋乃おもるうもつてはゆ也我思人のそとつてやす

南沢水と雲とふたへ源とるうーたとく ユシ くるまをる

くまうりーも サツ ぬるのう入れおこるうつー花

れおこちくも雲となく成ゆひて後とみと又たくとめ

てぬい サツ ことまを鷹を源うーや花さくー世上げ花

なるるー

あふめとあーい 雲と明ふよとひーゆーし サツ ぬるうと

ーしなる

又さうと サツ ぬるよと雲の中自地むとつーし サツ ぬる

人からーも たごいの人 サツ ぬる

夏夜 サツ ぬる サツ ぬる サツ ぬる サツ ぬる

おき サツ ぬる サツ ぬる サツ ぬる サツ ぬる

用 サツ ぬる サツ ぬる サツ ぬる サツ ぬる

お家の事 源増養ソウゾウまゝの事かすうてうりてかた
のむらさきもや お心をさすの縁縁是竟シキヤウ空と徳トクあり
ゆくたさへも變 訖たる心也

おれさしと 知チし縁縁と服フクの何と費キつらう 保ホて一暮
乃ノるる意イれ服フク減ヘきうなり

けさう 葵アヅキのあの日とりふふり中ナカおうたさふ
れレ乃ノぬ人ヒト

さもうさう人のあま事 申ウタお けさうもたさ
元ゲン林リン仏ブツんこととて可コ徳トクえ中ナカのノ業ゴウ上ジョウとたさ
こそとしあつこれひと木キ某ナニ乃ノぬらとささり
夢ユメ未ミあつたを思オモひてと也ヤ被ヒ脱ダツりノ事コトに中ナカおを

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured.

さささふくたえとてたさりや水ミヅ某ナニ并ナヒおを所トコロせささ
るさうし定テイ家カの統トウまゝの心ココロも縁縁やたさりれお統トウ
おうまぬ人の事 女メ今イマ けさうもたさ
たてし御ミコ統トウの水ミヅおとて可コ徳トクえ河カハ流リウの委ウチ可コ徳トク
大方オホカタを身ミ 源ゲンつとさうすつを橋ハシと飛トビとる自ジ面メンを飛トビや
ひとらうりまき 中ナカおらもを考カウへりあふと忘れぬ
あしや なる人ヒトはまぬくおひつるされ也ヤ再サヘ

十日の月 十日又日比ヒなるる
の世ヨとさへせる

まうぬぬ花ハナ揚ヨウふがとさすの世ヨとあうせ新ニジ声コエや也ヤ
町チヨウ名ナの成ナリゆひり 女メ祝イハヒ家カと合アヒて也ヤ

浦をとうり群

映く流氷カクク 首望影蕭々シロカニ 暗ぬお宮サマ

白民文集

妹の垣ねる 独りてささうれ 文弗と妹の垣ねる喜ぶ
とせもや 源の群を群るよひとて 夕の心營うさ
り故や一度とや

独住も 妹ありて居るよみたれとも 何とやらんさ
しとやま人の引かれむあつめ

くす箱 大おれじういふのくす箱ざり
むもや 大おれま一人の死さうし物思ふいふまの
めらねらん

おののこねるー 夕れ源とえはあひや
おのうふみー 夕れむゆー

ちのうさ得ふたり 八日ヤツや
何はうりのほひなる 一人のたあふさ

和漢ワカンをセリ抄コウ集クミ昇ノボ陀ダ羅ラとシ思モふト也カ麻マ也カ事コトはシるト事コトはシるト事コトはシるト
なつー 偽イツ邪セ淫インとシるト

りともとりたてて 雲上佛はのりた事とれり
ふんフン

うらもあまのひささきとも ちのせうとさういふ
あつみいふは子けりとも けしあつらつらとむらあつらとけ
短命タンメイとつらなり

うんをあつらうあつらも 長命チヤウメイの人あつらうあつらも

ふれとちる方 ケシカ 葛藤の暗雲の夜 朗脈

夢を枕書とて源をふりてを別とて 源れ思を草の不

情とかなる方

表ゆのみをわくものゆきを辨たしてつゝふいせもさふ

七夕乃方 七夕のあふくき事ゆれよあうし成てはの

あゝと 下を巻也

因のそとらん 秋を秋ゆふき事うへにならぬ秋の上

のせ秋の下者

あやうわら ぬりとも十九日とりあうま小くを周

己とくしり

巻くふれ方 中ぬ 秋かうと悲^{カキ}一巻事しれはさうして

あゝとくしり

人こあう方 源むのゆ

わくは海ひく事 いあうし可^{カキ}事

ま後ともみ事 源むを明也 川を不及

かりしりく 秋を月ひくも時ぬのかりしりく

神ひけらるるときなりしりく

大を方 うらぬしきもつゝの不乱とて 馬と幻^{カキ}ゆて

術士^{カキ}はしき事のりあうと尋てと 源也

乃中ぬ 巻針 兄弟前

小思もて 馬擲十一月中のぬ日^{カキ}秋堂舎辰日豊の高舎

よらぬあひしりてはれくともとを物と為すしりく

一六一度れ大書をゆめい

りあへあやしりまー 又節めるり次へへ之引信り

けりやれまうお万事一紙走のうさうー思召出せり

ま人をま 源目流のううーうーよきと糸と結て付る

ま的をま舎の物必日月れまもれぬとふとなみこ

もいせぬへり

今りや 隠るるりい詞をーしーれぬらり

たまはあー たまはたーもらぬらうーみいぬーし

ななくもけりぬまままきり 後撰

女けく まへ破流ーぬひーる

ちとせのりこみお ういなりーと思ひおりひうぬれたの

泣そらとせれぬえまらり

包けー人の 抱双紙るー昔まーれ抱あものら

かりれけりゆをみ

候^{ナト}子^上走^ヒタシ 日^{カニ}壤^シ我^ク 白^ク徒^ク念^ク 唯^ク持^ク老^ク年^ク

涙^ク一^ク瀧^ク家^ク又^ク 樂^ク天^ク

志^クの^ク山^ク方^ク 泣^クを^ク筆^ク也^ク 十^ク王^ク經^ク 死^ク天^ク山^ク門^ク集^ク鬼^ク邪^ク

志^クの^ク山^ク藤^クと^クみ^クて^クう^クる^クる^クり^クけ^クく^ク人^クよ^クと^クと^クと^ク

しとそ

あの世なりー ひまへれ事ー 源れ心

あやーくーいやめならむを ぬーいーや

うーいーに 雲上の文れぬらうー

めきつりて 源堂よれりふりや又もひとくまれこや
所傳るも 元統承和二年十二月十九日 始之也

今や去日撰めり

志やくらやう 佛名才三枚 錫杖初好中より家け祝云

とよせり 錫杖經

ひり来ふりふりて 導師 源氏の初すうとす初てや時

だうしれまのけり 仏名導師 録乃事一也

あつけさかると 禁中 仏名才二枚 拍經 勸盛と云事一也

若右道中 御氣某の持津國 拍經 云々と府官人之

録なり 延喜十九年 佛名導師 也 律師 賜法 阿方也

又うそつきて 白及夜礼佛名經

町まうらうら 伝遊あまとも 禮のまをともめくも

はつりなり

ぬこも 三て心おしるも

春まへ乃身 源

多々の心も 導師

もろしつ 双也

その日ろ 佛名目計也 肉よのここのまれをせしるめ

は書り

おやこんお

爆作 勢 鄰鬼 驅 雛 小兒 東坡 大と孫

まより鬼をけとむ 殿上人など 抛弓 葦冬より 射也なり

Handwritten notes at the top of the page, partially obscured by a piece of paper.

方相良と云鬼捕許ともこそを俵子とて亦人緝布衣さ
たれゆ卒官門とぬるやうけくさなとていひおす
又きさしとていひいひおす

つとま ことなる

物たりやとさ 上句教忠奇

とれ思ふはこころに包れ月日もさしとるごと

はりくら 院号を釋乳天子とくハ小朔拜と云る目なり

三教きまらと云か道れ経と焼くことと云るなり

麿勝と云る南と云人抄漢國儒道仙を佛道に焼く也

さし 亦子燦行よ分あることと云る尚可為也

白文 昔き悲号と云るやのさ

山詞を寒ふ 古進言 源氏と國名と云

くくはりの翁のふれ田りやと 大ぬりく題也

是二り程もてさうくれの事を篠尺ありと云

れ人れ遊玄といふ事也 万葉 遊去れ町の音

とく光しぬ余やあまを教た人乃家とてと云く

進よま け外不可勝計

めくりきてみやうれたまのぬまふを源のよの

月くれ 日れ光阿まのまのききやと云るなり

を云かくれけ ち隠事と云る事也 天台四門

礎之 空船中事と云源氏物語中二に相程作相程るれ

十六 十五

し空道又比延在亦能諦 志源中一道

叙号又同は油語

示人之言

又又十回始皆亦亦也之意也源氏中源の後醍醐院位
乃亦也のり 是又亦也亦也也は儀の借用也

は物種之書好むる所示佛道之立可具志源事これもの
のこり中一人義多亦亦者之外志多受自桐壺至世

上既了尽源事不言之志書し可言終る也又世
氣仍志源中環之也

幻卷与は卷九九年なり

是九年幻卷なり又廿六才より十回也九九年宗祇
を年立お遠するとて蓋益一画をてみられ

り人日 源氏の事 是の年とつて也也源氏の
らに朱雀院共すの役仕大は舞志逝去りて志源も

も事り 源氏れもゆく連なりはのりとも不承也
ひつと事くれ 是志源院不承者一は二三迄は行

し皇震一は事と云々 天子崩若皇震と中一也
はを幻卷乃次年より是二月より元服とわすまて九ヶ

年也 是れ幻小又歳はを始十回才二月元服其年中
る但も又十九歳より三位宰相不承事あり以下並卷

云々并至治はを不混乱する所あり別不承事あり
この事あり 源氏宮家才能心操は所著するなり

ところ 夕れは子なりとの也

おろののみりし 冷泉院

おとしあかき 密通乃な也

おろおとく 白文を六条院より行ひ立給ひしなり

まの目の志 兼二おれ文乃清子もれなり

いとまきゆき 忠告しこめくさて南代のみを勝れしなり

源良経の被群きゆともや也

さねはなうらひ 今く皆くの中へまをとり

あぐたまさり 源をそへく大治おとのおろししよきを

のあへれんく源をとうあひしなり 源氏乃清子孫と

て感^{イクラク}あつたわ志のしなう源の事とことく

しゆいもんためりち

おろしうらん 明ハさきうらんしんしんしん

まをれも 白文清子かきも也

あつり 二条院

あ一文 東文とけ一版^{アツ}上り 養^{ヤシキ}れぬ人

兼上れぬの^{スナキキ}お即位^{スナキキ}たうす 南の町東兼上^{スナキキ}射也

二文の 東文のけ一版 梅^{ウツク}壺^{ウツク}を^{ウツク}曹^{ウツク}目^{ウツク}より^{ウツク}町^{ウツク}く^{ウツク}六^{ウツク}条^{ウツク}院

の寝^ニ殿^ニを^ニけ^ニや^ニり^ニて 夕^ヒ妻^ヒ乃^ヒ中^ヒ始^ヒ系^ヒ成^ヒびの

る^ヒる^ヒなり

次^ヒれ^ヒ場^ヒの^ヒ 今^ヒ東^ヒ文^ヒ乃^ヒ即位^ヒ以後^ヒ東^ヒ文^ヒより^ヒなり

お^ヒの^ヒの^ヒ 夕^ヒ妻^ヒ 大^ヒ姫^ヒ系^ヒを^ヒ 東^ヒ文^ヒへ^ヒ也

つ^ヒつ^ヒて^ヒの^ヒま^ヒく 白^ヒみ^ヒや^ヒへ^ヒ次^ヒ弟^ヒ乃^ヒ海^ヒり^ヒせん^ヒと^ヒる^ヒ也

東へへともやあうきしれらるゆへにや

あの兵戸御 自十二六女なりともや 夕の息女への事也

何うともやうの物 同格乃物ともやあへも二まう

ゆへに夕の息女也

うらりう 亥うあうへまうなりともゆへに用は

そひかりる

六女 夕妻れは女 夜内侍のすけ乃腹首末巻うり白文

乃あまうり腹首人

まぬくつともひ 六条院れ人くになり

のんが院 二條院の末院 源氏れ向もうりさるる末指

むくあまうり也

ゆへにおも とうおともひとと律只ともあはれは後可爾

今語 的の中支杖好のゆへあはれ今乃字入る

この院也

日本書紀の傍也

うらりうの町 貴お中れ後者也

一系文 高野也

三系教も 志井うり列の樓乃うりと志来うり左のゆへ

ともまこれわの教りともれともうりうり又あはれ

ゆへにとも

うらりうの 明るともこれ人あへり人れ首級ともや

ともあまうり 左のと書 史記

火をあらたれ 法苑珠 佛の教滅度也新書火滅

まて敷れうり 世上乃人あなり

かきり多れ 源也

まれば乃 まてりめらうてとまるるのいふ

とさくは思ひまきまへれ心なみうるゆなり

二果きの めこま のかれれ事也

後乃 秋好 うかぬの事 公新屋より

院より 笠巻乃事なき 巻ふと巻く者なきやるる

十四より 元服志願して十四の年二月

竹屋より中ねよの十六歳よりぬれつるより

末の冬より入るよりこれ初は同年のやうか

これと昇進の法才とかうくわれははしと十六

の秋に除目し中ねより一はつる

階也行事れれゆつりぬとみぬき乃私の決り

みあふすとたり

おろしませれとく 冷泉院の中れ

母より一はなり

女乃所帯き ヒメキヨ 婚志よりけたり

こちらにねいぬ カシイモト 柏屋冷泉院へ奉賜してこれと

こころぬい腹おみま只ひとりあり

まことのま乃 秋好 廿一歳冷乃所

とくま 秋好乃意をてはけおをたこのあ

まよ前のみるめおねのあや とうらまて

も秋好にねいとうよの又意と思ふ感

まて敷れうり 世上乃人あなり

かきり多れ 源也

まれば乃 まことりぬらうととまるのいふ

とこゝ思ひまゝまゝれ心みくうふなり

二果実の 女ごま のおれれ事也

後乃 秋好 つかぬの事 公新屋より

院より 笠巻乃事なき 巻ふと巻く者なきやうに

十回まくやうく 秋中お 院ははらうとまゝとて御

あゆまうとく つかうとくして 累をきくや竹川

りて御徳とまゝいけふるりあてし 花きかきけり

り 如い思て可哉 叙位の町院乃所好とて 叙位のお

階カキ也行事れおゆつりぬとみぬき乃私の決りく

みあふすとたり

おろしませれとく 冷泉院の中れ 射カキとのおれの御曹カキ

御よーゆへに

女乃所事なき 姫ヒメキミ恙よりけくたり

こちらにれおぬいぬ 柏カシノイモト好冷泉院へ奉賜ひてこゝれとく

こゝもい腹おみま只ひとりあり さまゝもいぬ

まゝのま乃 秋好 廿一交成冷乃所 けき流うと

とくま 秋好乃意とては けきとたこのあーの

まよふのみらぬおねのあや とうらもまてぬ

も秋好とれおとくよの又意と思ふ 威イカガフえとたれとま

秋好の御曹
御曹の御曹
御曹の御曹
御曹の御曹

三修し佛と也 母文をわがりの母と也

百ありひいしむる 母文へもねむるしむしむる

同方と分多くとる也

力のまゝ 拘カクの突ツキのふりかゝる

せんちう太子 河内中よんせんしつとま

せんけう 帝後の中めむ成さくい太子と

聖太子 善巧 日名兄 邪輸多羅也 日位聖太子

羅睺羅生阿多事 三河海 必河 畢竟不説りのあ

とひりてあつらうあつらうあつらうあつらう

お母つうれあ 六条院れけ子の訓とれまを又拍事

力のうぶ寄れくとけおやあつらあつらあつらあ

ま人もなりやと 畢竟まがまが乃理ま死なひと

ひあつらあ寄れ

とあわれ せうり心なれとすし

けくがあふ けくの恙字 虫の心也 念心ニヤト勝サツラと

思ひのあつらう

もちをれあも 甚密のふらうとまがぬ心とてけり

跋むとあまむ

いけのなるり けりをるるりくとまふり

ろまことと也 女人力たると障 一若不得能コト天王

二若帝釈之若魔王 四者轉輪聖王 五者佛身

よのまを流しよらん 拍事

Handwritten notes at the top of the right page, partially cut off.

世後をても
うて不用 生をるりの事なり
物うらむ

由ゆも 今上れ東文の由時女三の事と兼薩院は御屋也
るさい乃まをる 的る中一文字と六事院まくやのいよ
わひ出ぬる也

来ふむまれ 源れ来乃代りなり

おれれとく 夕書

そ縁と給ふ 大は應旅有也

とてまのめ 酒ひりちかたりの事なりと也

いみき世れ 大延中後報苗乃むなる事なりとなり

後の世乃西つとめもさくさくしぬる事なりと也

いとおとく志流ひやせと道流ともみしる事 時

あの悉き 甚也

うらまに居るはる 佛菩薩の悟陀胎一々今身よ生れり

とり人里

これよのうがひ 天人乃むれ をれつり香也

三十二おを世二の毛元より出也

大祖宗御初 香沙子 生れく何一也甚しとる事

豊徳太子も同

おつれがこ 源れは子文ふとをちつれもさしんあり

れまはる 源れは子文ふとをちつれもさしんあり

おくろく 甚しき事本成とてうらりうらりなりと也

りひほくをて せよろーちとぬ也
やうこしとなき かんこしとあまこし

冷泉院 住乃^{カス}みれとれたん腹也

りーあこまそ ぢがぬのこーむり人あうとめくをあ
りーとたり

十九ふるまは年 煮十四より十九まくの事ひ奏り

わり決のきりん又立ちぬりて先年乃事ま中一ぬ

通官ぬ

およすけ ぢとあーさむをたり

うとつ院れぬお 煮まか一まと冷泉院り 五^{ナレ}孤ぬ人ま

白まの心をくくぬまこ也

たがしーま 煮一ぬぬ大のこれるりこまへたてぬりぬ

ぬまのあしこしこむゆらしはまぬぬぬ也

相別寄 うかぬむ

りまかへん 煮ま^{カク}せぬのゆ香はこーて人のあへたてぬ

けんとたり

りまぬれぬ 引^年草 煮一^コ心響也

事りありまろ 女三まのあしこし煮かみゆすこー

るえらりけい也

のあまーきこもの 便^{カク}り人ぬたり

ひふそろろぬ ぢひろーとあうのこしこぬぬ

まろむろーとさん 女三乃まの事一と煮乃心ゆなり

りしめあまひてのよれる油 お監以下舞也 曲字

舞名院殿 初ては流し一紙を平油をひねるをこと心也

なごハあや 舞の教のやまをあやなり 揚乃流りろよう

みも流うやきかしく

香よろう かつ高うまき海うひぬ揚花まによう流り

拍なるるまはれ

みこまぬき海り ひつな 初かた乃交作な流る 願うころ

心下り合あり

心乃すけ 夕の詞 カカ 意也 もより流るへ

まらうとくごまや キヤクシ 宣にめれころとかり

流のます 求子二條 ハしめ 風信 拍子合士

祢のまは花祢のまを求子の二條之右のすころのやとあうたのやとあ

たのやしめ 二條 タノヤシメ 流れまよあのもまらう求子音

まは又云風信云

かこ 流業下のぬ

しめあふひてのよれる神 お監以下舞也 曲字

舞名院殿 初ては鏡一に玉平神をひけりむと心也

庭こハあや 志れ敷のやとさあやな一揚乃元りろろ

みしけりやきかき

香よろろ ちるあよなき海くひぬ揚元長によう初ろ

拍なるるられ

みしあふさ海ろろ 初め乃実作な舞を 願うころ

心下ろり合あり

ち乃すけ 夕の詞 意也 ちよりけりへ

まらろろとろ志ち 宣仁めれ ころとかり

神のます 求子二條 八しお 風俗 拍子合十二

二條 各六 やをこめきこりちとあうたのちとあ

たのよし女 二條 神れますあのもちろり一求子音

志又云風俗云

可也 志業れ下の如

二條各六

紅梅 白文並の二春礼事あり 白文並南河のあり
するを竹河紅梅やみりとも堅とり人共携り交り
以訓る巻名 意女方

この比 昔の心と云く 以巻末よむ大長一 ほど同河
夕雲左子情を 察察使より大長よ但するがひる
い巻末竹川乃素推のりこれ同河のりもあり
所一けき 又入るが不用 次取ぬ又お母とも所一次
とせり

後のお不まれとく 舞也 舞也

あつひま 雲上の父まこくまおあこせまのりひり
雲共お脚うせあふり分注サキ幻といきまのり

十七八年丸

成子や 紅梅大長同家の股う 女二人南殿拵の股小
男一人雲の成子これけり女一人也

おろ一子月り 拵
をれくはりのこの乳母なと乃南母ま子とそく終く
一は事をもくとも拵拉むりう可終く也

南河もてり 大綱之のわがい志と也 婦也

き乃のり 雲共おの女お拵れたあも人あ子終
お拵とらん
あつひあつ 文巻れをりひり

内春文 内より明る中へまはるる一まはり也

心乃大もの 夕暮の心大なる女所おるる一まはり也

今之たるれやまをりし乃を ちとりの人

下つてせまを しまるる一也

十七八のほこまで 紅梅 編み

打まがひ せひまうひ 次才くなり

正力こころ 静る侍押丸

げまゑと 紅梅子息拵拵れ殿 白まとたそかれ阿うひ

たすむり

せうとを ^{キヤクヤ}兄弟らうらとみてはいつく女^{タチ}急^{タチ}選^{タチ}渡^{タチ}度^{タチ}と

白ふれ化板也

とさるん 紅梅へかゝりぬ人

うすりの柝れ ^{アサキ}合^{アサキ}教^{アサキ}と 春日の中も伴おれり一まはり也

し女もあま栄下るるまをり一かりぬま目れ

ちの柝のゆらぐ人のゆらぐ後朱在院の柝やを

曆三年四月五日柝被訴申ち柝宮云度

々官幣不請之依兆有氏皇居也依是内ち居

教通之二女可入内之由被宣下る其年十二月内

ち居女真子入内か柝今案名曆の柝は相

終ひ存のゆらぐまをり一は柝上のせうらゆらお

つうらう一と一居るよ乃ていづこのあり一

やらん

院の柝の柝仕のかくれぬ女院の柝うら

弘徽殿とさうさう一ととも秋好中まよとさうれ

て立后のゆらりり一とむひいづこひぬら

一ゆらり

この柝急乃事

柝急乃事

わりの芳さぬ お梅はむすの娘のこころありつひてとや
おきーあとし 大綱言ハタと 回事とせ

母さふも こころききカキまけてぬへはつるをきかたり
まよてきさの事とつらと又後乃討おぬうのぬふひ
みこころ

あつとささうの おお討

こころせおけて 夫婦の誓チカリもをりまらぬとさる

世はろむくくおても 恥を思ふおなりてまより
らんとやお方討はく成るの程乃事な

系りくへまは小おぬおけく大綱のやーぬ入る

世中ひらぬ 世よをひうー我ひとめおぬと人あり

とう孫むむ

おまのひ 河みそい

お戸のちよ 下まをくまきおぬりのとる

とるうれくまはあゆうや

ひうーおぬと 又と共勤のまのうー加たぬとる

おのれとく 又苦たけくへえといわぬぬあり

源中納言 意中納言のうー竹川れ事おもを町お梅

もお大目也 まましく大綱まともより 推中チカモトれ中

おもあこまり白文より 推中チカモト又美濃ミノれより

てげがひまきおふい 小登小町のま乃中 瞬よあり

いっ 源れよりおふいとてむぬて可成れ

ぢうさす 琵琶 桐弓を唐中のたよむきよ下よあり

女のきか不^{チカラ}入^カぬとや中しくよりたの^{ヒニエラ}勝^カとなり

あふか^カら^カき 皆^カ紅梅へみしをれ申ありのきなりと琴打と

をけうすしてむり^カ炬^カてめくれ^カるるを^カれ^カ也

おり^カり^カも ^カさ^カの^カよ^カし^カ也

ものおさ^カの^カ お^カご^カの^カ髪^カと^カり^カる^カ う^カら^カく^カま^カみ

ら^カく^カり^カも^カ花^カ敷^カと^カ童^カに^カ東^カ帝^カの^カ内^カ総^カ角^カと^カ 敷^カ上^カ人^カの^カま^カの^カこ^カ也

これ^カを^カま^カら^カう^カと^カま^カの^カあ^カす^カい^カは^カ衣^カと^カの^カ 嬌^カ女^カと^カま^カへ^カま^カし^カ人^カなり

両言^カ傳^カハ^カお^カ方^カへ^カなる^カ也^カ

ゆ^カつ^カら^カま^カえ^カて ^カあ^カら^カは^カあ^カら^カゆ^カつ^カら^カま^カえ^カて^カ無^カ程^カ程^カと^カお^カの^カい

く^カの^カい^カと^カい^カて^カま^カる^カ

ま^カつ^カて^カ早^カの^カま ^カわ^カら^カき^カま^カの^カ笛^カ早^カ也^カ

所^カは^カひ^カま^カよ ^カれ^カ弾^カ ひ^カま^カら^カい^カの^カ

う^カそ^カえ^カう^カそ^カ笛 ^カあ^カ梅^カの^カ調^カ子^カに^カ合^カを^カん^カた^カめ^カら^カう^カそ^カ

吹^カぬ^カ入^カり ^カよ^カら^カう^カが^カなり

け^カひ^カの^カい^カれ^カつ^カま^カら^カう

春^カ風^カお^カや^カ千^カ葉^カ竹^カ暖^カ自^カ春^カ唇^カ一^カ掛^カ花

れ^カま^カ人^カ乃^カ花 ^カ共^カの^カ乃^カ所^カ息^カか^カれ^カ湯^カ庭^カの^カ言^カ也

あ^カる^カ人^カそ^カう^カれ ^カあ^カら^カう^カて^カ津^カの^カり^カえ^カせん^カ梅^カれ^カ花^カ又^カと^カも^カ香

あ^カら^カう^カも^カあ^カら^カう

つ^カら^カゆ^カら ^カつ^カら^カる^カ也

わ^カら^カも^カま^カえ ^カあ^カ梅^カ乃^カ童^カ乃^カ可^カ也

ぢうます 琵琶 抱石を唐中もたよる上よ下よあり
 女のきか不入なとや中くより元の海勝となり
 曲るふらと 望紅梅へみしなれ申おりのきなりと琴打と
 をけうすしてむうにてめくれらるるを花也
 おりありも 志もてよふしや
 ものおまのこ おどりに髪をとけらる うちうらまみ
 つつと東常一の総角童敷上人のまのこ也
 まつげのてしお 紅梅の嬌ゆまへまししなり
 両言傳ハお方へなるむー
 ゆつらまきて 若き若きゆつらまきて無頼僧とおどる
 一のこといてまらこ

まつらと早のえ わらきまの笛早也
 所はひまよ 氷弾 ひまろいひ
 うそやそ うそ笛 紅梅の網子に念をんなめろうそ
 吹ぬ入り 一やうがなり
 びひんをーれつまる
 春風おや千葉竹暖自東簷一掛花
 れまへ乃花 共ア乃乃所息おれ湯庭の気也
 ある人そーれ 志なして泣きのえせん梅れ花もとも香
 ともおんうちる
 つそゆか つふるま
 わらもまや お梅乃童神乃可也

ちめりーきむるーすう 玉縁へおほくぬいのしむる
 あいししや 右共教の女末のくくはぬらふとて
 の縁也お光のくも玉縁なまをあひ思ひぬくといわ
 うらきみて 恨てのらひい討可まじりて
 あひて後けくけいあるひよや 又なごまごしむ
 事もふれと意ぬふ討也 恨ての後らへん乃つれは
 かつのふりひてのまごまごなりまう
 又もつりーぬんひをそれとあふと云ひぬ
 披れさぬ 花房 又も又て又事とある
 それういなる 討也
 ぬの ぬ乃又おとられて挿花香うくくくうか
 ころる 志本の心をよめるま ぬ撰 羽恒
 こらひきとのぬ 白文内おれうーま
 あの花れあやー 又の志乃事と云ひぬへま
 又うーま 共き申さぬうのろひ路もさるーと云ひぬ
 をとまつーく花白文の純の香とつるこ

一可切

ままのこをむぬ人あり可後
 志くむむらん 又不念と答 あたうの月と花とを
 目くむ志志連らん人うー思せもや
 びりまのひまくむらま 花お信明糸
 又もゆを先我首の挿やうむ志うまん人きみよこめ
 大酒々のほひまへき 紅梅れひま中志 貞子と白文あり

ちめりーきむるーすち ワカシ 王様へおぼへたいのしむる
 あいししや カク 右共おのめ末のしむるはふとさうて
 の程也お光のしむる王様おぼへたいのしむる人ともわ
 うらきみて 恨てのらひい討可まじし事御さへ 自由丸
 あひて後けけけあるひよや 又おぼへたいのしむる
 事おぼへたいのしむる討也 恨ての後けけ人乃つれけ
 かつのふりひてのまじとけけけけ
 又もつりーねんひしおぼへたいのしむる
 披れさへ 貴房 又おぼへたいのしむる
 それうしむる 討也
 おの 印乃おぼへたいのしむる掛香うしむるくくくくく

ころる 読本の心をよめる事 ぬ撰 羽恒

ころいさとのぬ 白文内おぼへたいのしむる
 あの花れあやー 又の志乃事をとひけけ
 又うしむる 共き中おぼへたいのしむる
 あけりし 白をひるー可切
 ままよとせむいぬ人あり可切 おぼへたいのしむる
 ちむる心ちらん 又おぼへたいのしむる あたりの月と花とを
 目しむる志連らん人しむるしむる
 びりおのひしむるおぼへたいのしむる 貴お信明系
 又もゆを志我者の掛をうしむるしむる人きみよとめ
 大ゆきのひしむるしむる 紅梅れひしむる中志 真子 白文内

思へとも自文を中意にうろひ路をすとりなり
すあもせゆへと 文意と事 大納言うめくしと
まやうお中意ともま乃やをあすせりあり
菟のまお言 大納言のれとあわろくしと
まぬ心とや あんくしとあ回乃たより色し
路りしとる也

れえれともおろししらせりぞで ぞ也
けえも 目のきまのむせ 新て 句
連りれけしうし 中く中れを著乃事しや
東のきまむむとーきとふと也
うひのあま海お ちのき乃むよあへんれををたうし

せしれとる也

まのゆしと 連りけしと乃れを花のあはてう
あひとんてまのきとあのもあよせめく白へ成せと
おのあひれ ま乃を東まへあのれへのらんとり
絲しけしも 初揚れし中なとあものあまるれとる也
申しとまをまを 白れ好まを不可強らよと思ひて也
あのおとつ連らが 文とあとりる也
あし人と おりあま好まむと也
まのきとせゆへと ぬき入ぬなり
めとけろ乃奇 かつまや つまやめ字なりし根が
白文のまがひお中意のしなぬとまをさちうさん

と花中君をさうせんともや
ゆづりのまふま
と梅の花とわひれうりるめりうれ

つひおさん 何とぞ伊ひうせんためしと思ふや

花の香を身 文交よめをき好まひりとふくしこるま

程ひとけき 文れゆむとけぬをむやましく紅梅を思ひ

たぐり

小方 拈担

人そぶをく 登人は何ともねもたまあつましくしむぬ

くうとと云ひぬ 人をれれ自強と心懸てるらと

文れつとれ海しとらとて まま乃の拈量と也

おとい詞まくお果

ひへ我をさしあめらと 意 ^イまよいむハまればらうり

春交のみ恋のききととり又恨けひと也

お方今うしくまは入り

ゆそろうらや ゆ文ありけりうさきみとさうりとびり

さうー 大納言詞

ゆそととめぬ非 まうらひあつ女もぬ白うらハそー

めぬとるや

梅を打ひおさん根うら 白意乃天性キキの奇特キキ也

梅いおひおさん花梅の根よりかきりうら花と とるそ也

梅いおひおさん花梅の根よりかきりうら花と
これと源中細えよめとらうら花中うらうら
手い白文うらうらと

ゆーひのひうら お梅の娘を討の人心をのくふなり

とれ中一君とたつとせんとや けつうのまじふ
と梅のいとくわひれうりまぬらうれ

りひおさん けとそ伊ひうとせしたあつと思ふや

花の香を身 文交よめをき好まけりとつとてしころも

ねむとけき 文れねむとけぬをむぢまうく御梅を思ひ

たすぬり

お方 拈担

人きおをく 登人ほ何ともねもたまうりまうとて心ぬ

ころとと云ひぬ 人をねれ自強と心算てゐると

文れつとね海しうとて まま乃ほ拈量とや

おとい詞まくとお果

ひへ我をいさあめとて 悲^{アハ}まよひむハまねなりう

春文のみ恋のききととり又恨けひとや

お方今うとてな入り

おそうらうや 御文ありけつうりさきみとさうりとけり

さうー 大納言詞

あそしとめぬ非 まうらひあつ女もぬ白うらハとて

めぬとるや

梅を打ひおちん根うら 白蕙乃天^{キキ}性^{キキ}の奇^{キキ}持^{キキ}成^{キキ}と

蕙^{キキ}自^{キキ}強^{キキ}うらとと梅よたとるそや

け文なとら 白文

あーひのひうら お梅^{キキ}高^{キキ}娘^{キキ}を^{キキ}町^{キキ}の人^{キキ}心^{キキ}を^{キキ}の^{キキ}く^{キキ}ら^{キキ}なり

まをゆふさひ乃のこま 穉字ひるし叶るり

白をぬさうしと思ふなり 幼梅ま子とのこまとあり

うむるしや

活文あまきと まゑへ白ふの活文細あり

大納を悉 幼梅を中悉を白へとひうけゆへに

いと神しう 大納言れ中悉をとねもそねと引たりぬ

あふむとおふむ

はく 東悉へ白ふの心紙巻ゆへに

とりのなき 東悉より所也事するに也

おひされと残す 白文の事とお方心中に思ひゆへに

八文 字浪巻 ままもとも同付るするゆへに

八文を 厚氏のゆゆ 桐壺 八文也

推中れ巻るしあけりとめとれるし

沸ひゆくしし つかぬの事

ぬめやうおそ おも東悉を白へとむと定ぬとあり

おやししとたぬをめくしとて 文もたれ

かしとる

おこたげられた まかぬもの思ふ乃ゆふとあり

あらしとるま おしうもふりあらしとるふも事あり

竹川 うこひ栢の糸 以テ并詞 ヲ 為美心

撥乃逆るれれ末より登り成る事 年比うりて
打とあまを白文表以下皆以混乱せれと可ひ時委

あまを 登或分我り不書心をあつをきりは筆方又一也

源氏れもくとおのあし

源氏の清ぞうあもえなれ 舞意乃事を書あしをきり

故おがいのの紋仕よ決れ太政大臣也 故 非野路

登れゆりの中も 登上を源氏清頼子よて後の小方

タニヤラ 玉鬘も頼子まるとしりとも清頼子ああえられぬふあ

不お似とれ 花相遠

女おまうひあれの 隔ん也 登のゆゆりよんとあとも

つひびりなるる

ひのこもやも 冷泉院密通して源氏れ清子栢本の子か

のうきそ源の清子か 玉のつうそ夕敷乃上あうく

乃清子けうく源れ清子かかきと 女は事一ひのこも

とものうこけり

我より年乃 女ともものりひまら詞也

つひびり海とけりうん 登或初の交一なる終りや

つひれの女房のりひし事そと也

肉得乃うとれ清殿 玉鬘勢のりよといもんたあなり

玉のつう敷うみ人清子あり

わへびく 舞意うせぬひて後園白澄ともあ

れあんならふゆつこ 彼仕の一途也

ことの 敬 美色^{ビツ}ころひと元 思乃るなり

むく^{ムク}人れきりんか^リ紙とすすてひのじ

らよあつらふ也 儀後^{ビゴ}きいひ^キなるとまひ元

年^{トシ}ホふあつらひ^ヒなる也

そたつりく 玉髻^{タマキ}を^ヒ人^ヒされ^ヒとも^ヒ敬^ヒ無^ヒ情^ヒゆへと

く^クつら^ツら^ラく^クと^トあ^アら^ラく

れむ^レり^リあり^リも 玉^{タマ}まつ^ツふ^フせ^セう^ウあ^アま^マし^シる^ルこ

秋好^{アキヨシ}の^ノ次^{ツギ}り^リは^ハ神^{カミ}屋^ヤし^シと^トあ^アら^ラく

中^{ナカ}く^ク 夕^{ユフ}ハ^ハ美^ミの^ノ兄^{ケイ}弟^{テイ}あ^アら^ラる^ルも^モ数^{スウ}なり^リあ^アて^テ申^{マウ}く

と^トら^ラや

れ^レと^トの^ノう^ウー^ー ひ^ヒあ^アら^ラ

中^{ナカ}く^ク 明^{メイ}中^{チュウ}文^{ブン}

む^ムく^ク 無^ム徳^{トク}也

目^メと^トそ^ソあ^アられ 已^ニ被^ヒ揚^{ヨウ}妃^ヒ遥^ニ側^{ソウ}目^メ 上^ウ湯^ユ人^{ニン}

あ^アら^ラる^ル 冷^{レイ}酒^{シュ}年^{ネン}を^ヲう^ウら^ラる^ルと^ト出^デ甲^{カウ}下^カ也

と^トれ^レよ^ヨの^ノ来^キり^リ 玉^{タマ}の^ノ子^コと^トあ^アら^ラる^ルと^トあ^アら^ラる^ル

太^{タイ}大^{ダイ}敷^{シキ} 夕^{ユフ}芳^{ホウ} 雲^{クモ}井^イ股^コあ^アら^ラる^ル也

の^ノ川^{カハ}の^ノお^オ 養^{ヤウ}人^{ニン}あ^アら^ラる^ルつ^ツの^ノれ^レい^イ夕^{ユフ}と^ト玉^{タマ}を^ヲ

兄^{ケイ}弟^{テイ}系^{ケイ} 勿^ム論^ロ 雲^{クモ}井^イと^ト也

れ^レり^リあ^アら^ラる^ル 包^{ホウ}去^{キョ}け^ケあ^アら^ラる^ル 夕^{ユフ}と^ト玉^{タマ}を^ヲ

故^コり^リ書^{ショ}れ^レを^ヲ何^{ナニ}も^モの^ノ

うらさね うらりーきつう

お方 雲井より玉へは文おろひんる下宮とさうや

れとも夕暮ぬはれむかーとや

このそぬゆも 文つうぬゆとさる

今もあー ぬぬ鼻進もあうけとや

こよさね 可忍事とさお母しめられ孫と玉の心中

ふん鼻進の故をゆらす人し ガキかす悪してやむかーを

とよりさぬゆふゆへ日つうりーきとさる

くさされて 腐 免腐儒なとらて葉なと カキ移らる同字

六条院乃りー 甚れ事

四位 白文巻乃始りーけとさる

三文字の在るちのれとさる

このよの花げよの舞思のちねの心かこ糸
あゝあゝのまのかりーまひあゝ

あゝあゝ

あのあたら ぬ髪男の志進 又ぬぬとや

げふあふぬいー 甚

六条院 源氏乃ゆりことさなりふやむなり

かろーう 玉の抱あーなりぬ意へ抱經あり

ぬん乃涉心と入 源

けろーれつー 玉と甚とや うの志と 甚

りひあやまーけり ぬや香甚ういむとけてふやま

とがり

む月乃 玉へ皆くは出や

in
はらうさゆり花るいーのうまれらうさゆり
は仕のかとーの一家のゆこお梅とぬとさるの
ゆさる

うらさ死 うらりーき揃りー

お方 雲井より玉へ注文ありひんる下官と云へ
れとも夕毛ぬはれむかーと也

このきぬおも 文つうぬめとさる

今さあー ぬぬ鼻進もあつてはと也

こよる死 可強事とらお母しめられ孫と玉の心中

うら鼻を以て後をゆるす人し ダキエ かす悪してやむかーを

とよりさめぬふゆへ日つらりーきとさる

くさされて 腐 免 腐儒などいふて菓茶と カキ 抄たる同字死

六条院乃りー 甚れ事

四位 白文巻乃始りー ひん せり

三葉院 無とる女三文字との在りちの死とさる

みーーいーいーいー みしきーあーん

あのあたら ぬ髪男の志進 又少ぬと也

げふあすめいーいー 甚

六条院 源氏乃ゆくととさるーふやむなり

かろーいーう 玉の袖ありなれ甚へ袖縫あり

ぬん乃歩むとへ 源

けーいーいーいー 玉と甚と也 くの志と 甚

りひあやまーいーりー あめ香甚ういひとけてふやま

とがり

む月乃 玉へ皆くはせ也

in # 22m
end

清り〜〜れ 紅梅大納言 さゆう〜ひ〜と注也
大納言乃事〜ならむ〜

菰中納言 舞臺の西子母を拵と一服是又注也
明〜清り〜さゆう〜海 花人出ぬ

れ〜とを 夕秀

つらき明くせう 玉の忍ぶ

さゆ〜清事〜も 源氏れるゆゑの事と也

院より 冷泉院より

内よれ海を〜〜 夕の鏡 始末とまひ〜と実と

よひ〜とるを

女一文の 女侍を 冷泉院の女侍を弘徽殿と女一文

母也玉〜〜と女侍兄弟也

女一文の女侍 冷泉院の女一文は母女侍と記 せり入る記也
てん〜い〜のよれあ〜の〜あ〜と

女侍さん こと〜〜と記と玉の記

あ〜〜れあ〜よ 玉と女一文へなり

玉のくぬん 赤蓮れゆゑと源との事思ふ人〜と

よ〜とるを

あの敷れ 玉乃子 夕れゆ〜と也

夕れきて 玉へ煮はゆ 皆〜ゆ〜後〜也

夕かひ香 非也

ひめえ ねさなくせも煮〜〜ひひ〜となり

ひり〜となく 明〜れ〜は〜り ひとみとぬ換〜とる

清り〜〜此 紅梅大納言 さゆう〜ひ〜と注也
大納言乃事 ならる〜

菰中納言 舞臺の所子母を拵と一服是又注也
明〜清り〜さゆう〜海 衆人出ぬ

れとくを 夕秀

つらき明くせう 玉の也る

さゆ〜清り〜も 源氏れる所元の事と也

院より 冷泉院より

内よれ海を〜清り〜 夕の鏡 始末と文の〜と実と

よひ〜とる

女一文の 女清き 冷泉院の女清き弘徽殿と女一文

清母也玉う〜と女清兄也

うもくき ますんを〜と女清也

女清さん こと記〜と女清と女一文

あまのれ〜と 玉と女一文へなり

玉のくぬん 朱雀れ清と源との事 思ふ人〜と

よ〜とる

あゝの敷れ 玉乃子 夕れ清〜と也

夕清きて 玉へ煮清 皆〜清後〜也

まがひ香 非也

ひめえ ねさなくせも煮〜ひひ〜となり

ひり〜となく 明〜清り〜清り 心みしぬ様清〜とる

清り〜とる

まじり様 ありまじり 実なる恋曲と也

れつてえんハあ 蒸とちゆくみえれまじりことうや

いもやいと 久がねの子はなるをいふる也

よれもくそ寄 蒸 橋本 杭 色きし

括してしもまよみ成し 昔よりと煙捲らまじり日とそり

うみね 後札

我としつこいあこれ山よ志やりするもまよの枝乃情

かの世や日 笑枝はくしてもえああうら本也

あつこ神ふれく 蒸の詞

まよりも 人への言 まよりも香うきういおまか

ゆき津神ぬけ一首の梅うも

ねもかたれ 恥も不云と也

ぬめ人と 名付也

のふれはゆ後 鼻敷もいまこまぬるそ奈枝乃とゆのこ

まぬはくひくや 三糸文くも遊針とみるる也

れとく夕芳け糸とま蒸こ

めくくつり魚海 ぬるる本心けくをる海じ也

すま袖けくもん 羽也

ねるーかきー 蒸もなごー 必おもなり

つこぬかしくえ 蒸乃心女おまきけくよのうぬ毒と也

ゆこ志海へし海へ 蒸乃語ぬへ志くへし海へとこるこ

梅うもを 借馬樂呂 梅うもをうきけり鶴春柳あて

なげともいまいまゝさやうのけし

けは戸とあきて 肉より 女房室也

女乃しとまて 琴率一瓦 女叩こゝりけおくうん

まて考^{キカシ}持^チり しく合^カらうたりなり

たつとう魚しし 切^キられま

叩こゝりゆつりて うかるとおぬと也

こらしのれとくれ 玉のゆ子れゆ後して云^クせしゆふま

こらしれかき 花うらるる柏木のあるうらうらて 入りぬると人乃りふをきて
祖父のたとのつまおとにうらうら

ゆりし花とたり

うくひとあも 言^{コト}た^タは^ハ禊^シり^リ真^マ花^ハ下^カ葉^エ多^ク柏^ノ木^ノ坐^マる^ル也^ニ

あまをそ あまつて也

ひあひさりし玉を父とこのこむけいぬまきりしとる也

このまを 拍^ヒり^リぬるとと玉乃詞

されまうふ い殿昌也

あらし 年よりあるとの不^ヒ交^ウ也

これとくれ 舞^マを^セけ^テ不^レ并^ルうあやうなり

あうけきをれに 盃とあいのまや也

ことおとたふ 祝言とまのめしうしやま

竹川城 竹河の橋れけあなる義園お我とてけかてめ

あうらるる 詠也 竹川河内國 けかてま

ゆらせとうやめさーを同じうせとて也

おさし 舞い教も 呂れ奇

皆とらめたる事と云ふ

行河よき 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事
のりたる事 又とらめたる事 早下り也

ひふあのみ 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事
やよひ 世上は警の許なる事

けいぢのなる 静る心なる事 縁とのつとをある事

き事なり 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事
能事也 志のまはる事 ちのなる事 せむり也

まゝの心 けいぢのなる 静る心なる事 縁とのつとをある事
十八九乃 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事

十八九乃 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事
乃一とらめ

姉を 姉 勝とらめ也 又も才一乃玉の版よの姉

女也 此は内里なる事

今一和を 中一也

弟く 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事

とらめたる事 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事

句也の 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事

りんぐ けいぢのなる 静る心なる事 縁とのつとをある事

あふ 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事

あふ 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事

申の事 若くは後をきくも 故にひーととらめたる事

一とらめなり

并官を海りて 申ぬハ并官より渡りて穢まわふれども
まじと可切なるもくまき穢は穢るは同申ぬのまじら
のあましくもわきおのしきと人理とあるまじ可む故
れをわうすま ねらうますまじら
肉わくまじら 兄れ経

有敷 舞志海在せなりて姉志進も志やうなると也
廿七八のほくと舞志れ息又并の事なりても可證れ
ねらう海あうし時 ねらうまじら

ねま入れ姉志進のぶらせてやうれらうを兄きこら
者わうくとあうらひらうやまてあうひぬり
中ぬれ経るま

うくまのきこ 妹の志と也

あま泣れくまう孫と 泣のくまう孫まハたうつらう
となり

あくららけまわ けうあつらうれらう

は穢れ志まらう 醫徳千方白泥草丸八縁 童稚盡成人

園林海喬木 白良文集

弟のうれへも 切らぬあへり 舞志進なりや

人乃むくふ 左近中一途れ舞志進を不見

羨ふむくめく 友を申今日をぬらうむと死て者

あり 舞志進て心懐るれと也

何なりけ者てのけと ゆうらうと思ふ也

院へ参りぬらん事 玉肌男れ子達の云し事とのわり
只今玉へむうひてとを不考何よ付てりともとの心
と可思ぬおれとを立てもあ事とも之い後と別え

呵よとこうひて 新事其呵の潤子にとうとなり
葉をさいつく 玉文をい何とそと化やしる事

いさや 玉の詞夕れ才一乃女カメあり給ひしと也
かこりく 女侍小二もされそとかり

さくさくさくけ抱る 宗お玉前ツツと云人銚山セウ小をそ藤
あやと基とのあじ梅ウメの好一首とつて賭カケとす

あや肩カダて不ス能レ他ニ行ク玉前ツツひ代イて作シと云く 後代ノチノるれは
賭おねらま 矣

まつれぬお 衆人言の約後のりこへり まる不兄弟前
とつれて侍後出たる一也

梅夕の 嬌ウツクシ美ウツクシくろる
口とまらる けふ也

けふおきん 古今 梅夕く 衣ハぬおく深てまん其の
ちりるんのられおとこり

こまのらんゆう 乱群 才藤樂をむと乃勝くろを競る
向カクむと樂カクとする也またのよたをあれてなるる

あよむよをなりて 西乃主人とを嫁イモメれり也
西のくこよよりたるとて梅木とたのむとつひし

不認シとの凡ソノ人ノ里ノさるわういさしとやうとまき

Handwritten notes on a small slip of paper at the top left corner.

何の心もなき一むいり

又めく心むくやけいむりとなしてさあふきし事
と思ひてせくやうて只今を悔しうのしくひあつくり
すけしこれ 嬌意

あくるゆんき 思ひき戸さねのふりひるれとなり

勝負セツブういぬきしぬや

宰相の志 嬌女方

さくとみでのき 世縁セ縁親ししる事也

うの勝也 おとみ建を真マコたれを恨イミあつむとけり

きあえたさくきほ 戸あけひしを不フ苦と助タへる事也

風うちるき 木けりしを枝とふり

うらふおこなこへしれじや

ひありて 枝よりもあつたおのりたるれを落てもあ乃

候とようかれ

さくく花奇 訓公 されど 神さまやなつりふりあ

らんじや 大老ういれおふ計乃神もつれ春あく花と

風うまうせ

ひききあよ 花とやせあも恨イミせしあまも心きくき

負うこりひくき心や

かくのふし月日 玉乃心申 女まといめくとがり

女ぬうとくさう 玉つりの兄弟れ冷泉院の女湯よ

里玉へ乃せううこと 心と可切

うきあひ小冷泉院の女御とにくりおたりし事と也
私ヨキキ敬教乃女御のひるしあつひはなぬと冷泉の御
ちうあくとなり

されへまひし事 冷泉院へ姫君海りつた下らんま
せとたり

しく小帝と 雲井鷹渡せ光るる也

りつていほつてさ 雲井の文詞をぬぬれ事と也

お母しとあつても 玉系つてもは子あきとたり

文詞子と思ふ道よりよりとる也

ゆのなる事と 玉加つるの事とれ詞

あのがし成おかりし事とく 姫君乃冷泉へあつたひて

姫中 志をぬぬるゆつてんとる也

なへあまあつてむいぬも なくあまをせぬ人なりと

へれ雲井より文成事ぬぬぬの中へ志とてり

はあはらんと海をもみてと也

あつたつてい じ注也

あつたつてい 姫君を院へと又ぬぬる中へ志と

あつたつてい

あつたつてい あつた也

思ひつたつてい 中へつてむいなる事とあつていひぬ

きつたつてい ちへなり

まつたつてい ぬぬ玉鬘乃息乃後房へさる也

れりりの 悔くふと云詞 昔ふんおひかくしと
いふひりり

めくませ ぬお暮の勝負セウブの町目やんせと云くうを助言ダクオン
ろ肩ミテたきりーとけり

いてわおそき ぬおん市は暮とたきとけり
んろー海りーと思へとも何とく事そと方よ不

所と 冷へチニ己済あるとや
まをけやき つよまのようや目やんせの助言よ

そら海へのけすまおや ひやひや ぬおのひま
わいのけりり

あふれとそき ぬお又よめり てとゆるきをぬおとゆ
おせとけりし 又志なきる上人の心をまわしと

てもぬおの理ワキする合アヒりてあり程ハジりてや
りりり乃悉たち 幾人ぬお兄弟

れともも 夕霧
あふかく 念ネガヒ法ホウりや

くやう 夕霧正月一日の對面にむりつへれぬもぬ
のくやーまとなり

鏡をみるき ぬおのき ぬお乃のこまれ花をこまをみ
てなくさめーろ 冷へはつらとぬえくたがキ款とけり

本乃下をよこせしむ
しきい志よをこしひしさまのむ ーおのこらあ

さあは可憐虫の生死と云ふし舞はくしついで
又こころ乃新おのこはまをさるしや種家也詞乃か
後おふ実命あもりるこり我とやゆり
とりつぬまて 申悉とせめてぬめく娘路とくとなり
さ海もあうよわのあらしうしめまうしぬいぬの
まらまればくもむり

あの文とりの連て 是とみてのまれ文也
らふそ志はあまうつゝの世事いおをわぬひてきふ
うちるとよめり きふかうてをわぬしめしうりふ
とりふるしそ不云とまら

あはつし抑し けせあとおのくの人うあきん
たれごそそうしみてたふこめたうとくは
不書書と也

九日あそ 卯九日チウゴ縮女院へ参り入る
た乃大敷 夕玉と兄弟か也
いぬ事ゆへ 虫おれるゆへ 夕日玉と雲とシセツクは初也
あやう 雲の文詞人れを様を 虫おらうしむもな
まきこもる也

うき海とくしむら 虫おぬ院業ともあのかくあうまれ
をねとあうさせ給まぬとれいしうりけり物うし下う
を振こもりぬ
ゆくしむ事 拙思也

源女房 共束法 夕乃息

大納言 お攝

女中一納言も とも面白ておし也 拵拍をきり

と云ひ丸 解舞息拵拍同版

荒人乃志 女中ノ將へ又なこきり み違え

姫志違れまへまへ中におみる也

ゆきつこうらりーあへ里 唯今院へ入つてあへん様

多ら限なり

とれくお解し 咲よ 姫志違とあり

驚きれ事一なるお向ふ表也

とりて又あふ玉と云ふいり 姫の清涼を拵丸

れとく小方 夕と云つりのか 一まぬぬの念も限りなり

あはあや一まといの儀也

あまれてあま 姫志違のなりる人に念をのくおうとるこ

まらぬあまも也 ぬらも

ゆき一まうこもるん 念のかまひなりあはうなり

ての心也 女房前小あのを書てやれとの詞なり也

お和しとひり 院義刻の女おれむ乃とらぬ也

あらぬハとくし 念一もるたの念をたぬ一世中の

けはるれ物とのひをたすし也

姫志乃あま一とんとなり

ゆきつりのまへをそりこつ也

いりるをのき 女おのせき 娘若れ一言を不更しと志
よやせんと思ひしに不更お一と志と志

けろのうへ中 史記曰 季札之初使小邾徐君 徐君

好季札劍の弗敢言季札心之為之為上國未獻還至徐君

已死於其乃解其寶劍以之徐君家拊而哀之曰徐君已

死尚塗吊年 季札曰不若始我己許之豈以死倍我己

年 吳世家篇名

うこてもうへへと 又女お乃又ある女若乃見てりり

書りて 書替てやうん物とたりり

かとうつてねえからうづきよやうつんよとと
のううでうううー冷の店いれ好中まこ

ての内推釋也

治女治 冷の治 女治

うんぶらて 今おおを井乃内門也

いおーう 冷れ治心也

は治心の中 舞臺の息今女治也

うの治うこ 日承後治後を舞臺息

てあうらるる 甚 松よりまらるれ時を意の身と松の

比してやまもされ心死 てふとこりるぬゆへ今ままこ

治心こへさひまこらととや

ひううーく 女治心也

わの心の中ありぬ 甚う娘若をこ女治心一事の相

遠なふあり

いけるをのま 女おのせま 姉若れ一言と不買しと志
よやせんと思ひに不買しと志

所々のうし中 史記曰 季札之初使小邾徐君 徐君

好季札劍の弗教言季札心之為彼上國未獻還至徐君

已死於其乃解其寶劍以之徐君家拊而哀之曰徐君已

死尚待弔年 季札曰不待始我己許之豈以死倍我己

年 吳世家篇名

うこてもうへと 又女お乃又ある女若乃見てりり
書りてて 書替てやうん物ととりり

女乃乃弟のこお 是むうつうの兄弟れ女乃乃乃方急り
ての内物種也

治女乃 冷の治 女乃

うくぶらて 今をばらと井乃内門也

い物う 冷れ内心中

は内中の中 舞臺の舞女乃也

うの内うこ 日承後後を舞臺舞

てありらるる 意 ねうりまらるれ時を意の男とねり

比してやまもされ心気 ておさうりるぬゆへ今ま

は内中へさひまらるとや

いこくく 意内心中

わの内中ありぬ 意う姉若をさるる事一の相

遠なふあり

禁れり 孫侍等と交を通すれども其のまのまにぬゆ

りことあるに ぬくら イガ ひと目

海めなり ぬゆ

りし心海とふ 甚の心

ぬゆの甚とふ 書判乃懐衣申表とゆふらんれ玉の心や

院よりりのききたら 夕曇連

あのみつりまびて 玉の姫意院系以後ぬゆすく懐心や

殿上院乃殿よしてもなり

肉よりをかしく 舞臺の入りぬれり ぬゆよししをらの

りし御とらぬなり

中將 老道中ぬ 舞臺乃心とるる

ぬゆふより一のりす 由ゆせよ作とくこぬ討也

ぬゆかきぬ人きあや一むかうひて中ぬゆらとぬ

れどぬゆらしくぬゆとたり

りの志を 志みとあらてにをたり

思ひこぬらと 院への事とまてぬゆとぬら

ぬゆかきぬとくぬとたり

ぬれれとく ぬゆかきぬ

ぬゆみぬぬゆれも 向中ぬゆへとぬら 又中ぬゆ

者乃者縁を不念と也

中ぬゆ ぬゆ中ぬ

うらぬや何や 院れぬぬぬらぬらぬらぬらぬら

傳と内苑ののしこりおま内侍と廿歳人と清階乃う
るまゝあかた踏入りねふさうきとり又次れんく
まん六位れ苑人庭上りてふ又りこり庭入り錦と
つと置て次くの袋りらたといふ

包中一葉の 出ぬ乃心の月女日の夜乃花事也

まきののま 姑好中文 玉の常衣れ庭ひとつと可也

あのみもさうて 出ぬ也 シキスイ 飲釋水釋 ありあ釋を酒

サキ 者ほりりるや

めいりかひくるん 油思ひありて痛ましく独り志ある

をいづのしとたり

ふ一夜雨くもさありて カク 花と昇るあさうさう

かなさうりく洋也

身とうき タカ 踏方の言次を功若のする役也

意の言次とまの 敷上人さうさうひめくきり

さんたのんらく 踏方らん我家に敷方春遊しホリり

新春樂くと曲とけてさうるり 前より注之

みやを前 玉れ始也

祥雲さうらう 意乃油のぬへに敷るれをさうとさう

て也 中におかた

一花れ月影の 踏方乃夜の後りるる

桂乃御物ふらうらうのさうや 出ぬ義男をれり桂方

あももほはらうとや桂男も出ぬもを可恥と也あさう

やどろころひのやよみて可^レ花^レを^レほのめ^レあ^レす^レま
らんのおころなり

雲乃上ちりまの^レこま^レを 冷泉と月申^レお^レ定^レて^レ身^レの^レ心^レ

こそを極男^レに^レ配^レへ^レ又^レあ^レも^レ地^レす^レを^レま^レらん^レ山^レ院^レまで^レを^レあ

りあつと^レし^レこ^レあ^レよ^レも^レあり^レ冷^レ方^レ相^レの^レ上^レを^レゆ^レへ^レよ^レや

やこそあ^レや^レま^レま^レ ま^レれ^レの^レ雲^レへ^レあ^レや^レあ^レ—梅^レ花^レを^レさ^レう

みし^レ祿^レを^レさ^レめ^レく^レれ^レ 甲^レの^レ心^レを^レ乃^レよ^レの^レ雲^レを^レさ^レし

ころ^レひ^レ也 乃^レ云^レ只^レ今^レ定^レ定^レて^レ春^レの^レ花^レを^レさ^レう^レり^レ月^レを

言^レ道^レの^レ勝^レた^レれ^レと^レの^レ心^レを^レさ^レう^レ ち^レ表^レ紙^レぬ^レは^レ面^レ白^レく

お^レ不^レ心^レの^レま^レと^レが^レめ^レく^レ月^レを^レ可^レ花^レと^レなり

す^レう^レて 雲^レ乃^レお^レり^レひ^レを^レな^レく^レこ^レめ^レて^レま^レま

竹^レは^レれ^レ音^レ を^レお^レと^レを^レ西^レ月^レを^レ玉^レ鬘^レを^レか^レつ^レて^レあ^レら^レし^レひ

葉^レの^レさ^レも^レの^レお^レ花^レれ^レや^レを^レひ^レけ^レ進^レと^レも^レと^レなり

ころ^レる^レ事^レ 我^レら^レく^レ候^レく^レ候^レく^レを^レゆ^レく^レ—

ひろ^レや^レる^レ心

か^レの^レ心^レの^レ音^レ け^レの^レ心^レは^レよ^レの^レこ^レを^レひ^レて^レの^レなり

へ^レん^レ 惹^レひ^レを^レめ^レ也

ひろ^レう^レん^レゆ^レも^レ也 双^レ枕^レを^レさ^レう^レ

お^レり^レて 惹^レの^レ心^レを^レす^レ候^レと^レお^レ出^レく^レけ^レて^レ立^レ入^レる^レ

あ^レな^レこ^レめ^レ 院^レを^レめ^レを^レなり

か^レう^レこ^レを^レ 初^レ言^レ卷^レ。 後^レ高^レに^レか^レ樂^レせん^レと^レ系^レ聖^レなり

を^レ平^レに^レゆ^レひ^レ—ま^レま^レく^レあ^レり^レと^レめ^レく^レぬ^レと^レ今^レあ^レる^レ分

町こう 秘也 肉肉のうとたる一之穢シされも 辞退ジタイ

たつりしけるを仁所ニなくして玉のうへへるを今申イマふ

ゆつりしける人里ニ上ニまゐりてみるを官クワンなりや

もろく 辞退ジタイ也

おかしく乃由ニひと 秘舞ヒ忌イのまひの事一忌乃心イて

穢シ汚ウふともゆりしけ人ニ

久志クシ成ニよりる昔コト乃ニ違ヒ 肉肉ニクニク猪イノと娘メに与奪ヨクダクつりれ

此例レろや 其例レをる一不フ定テイ今の世ヨも女官メカウカンふと娘メ

小由コユ修シユる事一連綿レンメン也

あの志シの由ユをくせよて 申ウタガハシ志シ乃ニ尚ナカ尚ナカ成ニ成ニて又マタ家イヘ冷ヒヤへ

嫡チヤク女メを系ケイ新シンふりしけり

年トシ比ヒ志シ人ニ望ノゾミ不成ニ成ニ又マタ母ハハの辞退ジタイもとてつりしけり

町チヨウくしてむやなく 肉肉ニクニクをひ安ヤスめらまはんはも又マタ志シの太フタ

町チヨウこれ物モノ末マタを咲セウいふ一思シは玉タマ乃ニひ中ナカ

年トシの志シして 玉タマ乃ニ息イキ

肉ニクの志シをくまし 夕ユフ越ツキ事コト

大オホやあつとふ 乙ニ役ヤクおとの事コトもまはけらるる一

志シすを悪アクかりんとりり

志シやねし 志シやくらりしれよとまら

ひたひそ ぬる中ナカに

志シえのりんれ志シ 玉タマ

志シくくえ 志シ志シ志シ志シのちつりひ乃ニ籠カゴる一

院よりうつろひてまゝ玉へりていづれもさうむのまゝ

ゆへうや

はらうおのこまけあう 玉へいとあぢいひーのきこ

子娘会文とまうせなれよ又玉へぬひうけぬふ事み

も世上乃ぞいりしと思合て院つも不美うや

されいとお 院へ不参乃忌イミあゆイミ嫡女へイミ中子ぬへり

我とひりー 舞臺ハ嫡女玉を中志とおやししうへり

とらうこぬへり

院のうへりて 冷のゆるす 玉れ冷とさあめりーとそ

をくかりとれぬ也

年ひきて 又ゆ子生れぬへりてあへりて年と違ひり意

宰相の中ぬのるまはし

女所を とれてんがり

く孫く

のいり 世帯の道理も中事ササれしへけりや院中の

上カミもあれたん乃のいともる

ひのうこまを ミヤストコロ 内忌所とれ目わらまふりひかきり

れがうんき 玉うり

あてもれとせまうり かししへともを文ねこのよ

とぬひへホウシ 昇進あつおとともうの家ウチ家とれと

ーまきけいなり

宰相の中ぬ 白巻お十九才く宰相同何なりし

めしあそびのあはれなる ときあつりふ心也

みこはらたはれ 意を解ムコめし思ふ人あはれも意のまへ

路いぬとがり

終ひまきま 玉れ意の事とらふ心けりる

うらさげなる 女情とみやを前中意けりあはれもあは

へばさうようしんとま川の巻人なりつり

びわくの 衆人のあはれ 三位中おや

た大臣 竹川のた大臣とて 重系キヤウジツ苗人也

みられもくなら 東路乃るれもくなら書陰若のこころ

うらもあそんときとふ そとけりりる

玉れあそりあひ度と思ひ 意解めも 双地

心さひとらよ 夕たみ持を

意大綱を 取捨 按察大綱言乃大拍大臣の殿人へ

あのかれ 中一綱言に持す取捨巻もあはれ混コミ乱をり

三位れ意を 夕の息 中お案サシおろし殿はるり

まのりたてまつり給 世家礼して

女情とるも庭上のねんり次才先定りる事流

うら 色あそぬ也 志ひり乃 源代れりりり

少りしころも 意れ心中意の汗とがり

こころひあつて居てん つかるの心 冷とむと曲カク事一也

来りんと也

うらさひかとき 意位イイもねとふしと世路のり建路

むれ子の兄弟也八差とうれりく思ふ也

侍候と 名侍候 从申年より昇進キダシされり

とよりひれ 玉の子選年子シテ飲シあをを昇進キダシお座

まれも母様おふとのむりき人よとくおとやと

うナキぬ款モむとや

幸ねをとろく候とく一も 候とく一もさふきとく

一もかと云ひやとたぬハぬシ可シ候昇進とや

ワの下の下れ筆方や

耕ウラヤシむかよを款シ入りのとく一もシ候とく一もシ候とく

とむとぬくたろ

たいめん花人つてよいらく一もシ候とく一もシ候とく
ぬやとたいめんシのつてとぬらシとく一もシ候とく
のぬと



此子の兄弟相八差と云れりと思ふ也

侍従と云ふ侍従 从中年より昇進ノボリされり

と云ふは 玉の子選年チニトイ 歎ノボれりて昇進ノボリおせ

るれども母はやおのむらゝ人よと云ふ也

うゝぬ歎ノボむと也

掌おをとりくはさく一と 侍従ノボく一と云ふ也

一と云ふは侍従の御入の御入の御入也

わの下の下れ筆方也

耕ウラむかよと歎ノボり入りの御入の御入也

と云ふは侍従の御入の御入の御入也



